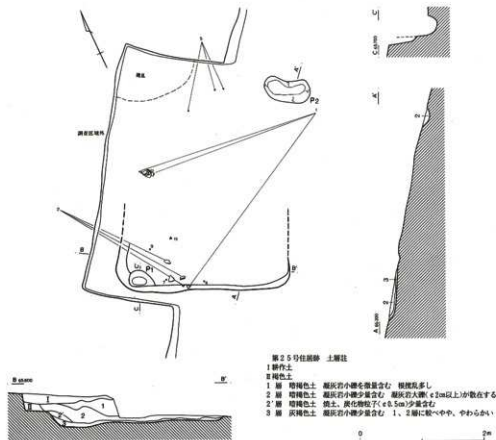


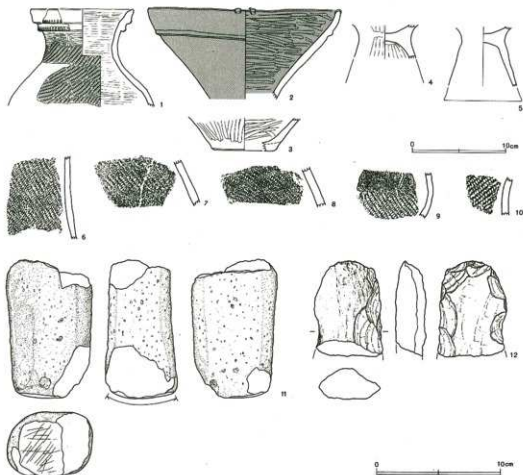


第66図 第25号住居跡

第25号住居跡 (第66図)

第25号住居跡はE-15グリッドの調査区際に位置し、確認面標高は64.5～65.3mで第1住居跡群最北端に立地する。現地地形は傾斜がかなりきつく、明確なプランも認められなかったので当初は土壌を想定したが、吉ヶ谷式土器がまとまって出土したため調査区を部分的に拡張した。その結果わずかに南壁付近を残す住居跡と判明した。

住居跡中央から北側にかけては流出しており床面は残っていなかった。また攪乱の影響が顕著で遺存状況は極めて悪かった。あえて南壁から推定するなら主軸方位はN-26°-Eほどで短軸長2.7m前後の隅円長方形であろうか。P2はやや推定住居跡域からはみだが、覆土が南壁付近と同一で、第25号住居跡に伴う可能性がある。しかし柱穴としては形態が不整である。歪んだ楕円形で底面は岩盤であった。残存する床面は地山灰褐色土であった。あまり硬化していなかった。南西コーナー部に位置するP1は貯蔵穴と思われる。径42cm、深さ14cmの不整楕円形である。住居跡ほぼ中央にあたる部分から少量の焼土粒子を検出したが、炉はなかった。流出した可能性がある。



第67図 第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	壺	11.0	(10.4)	—	w・b(細)	B	鈍橙	60	突帯に刻み 単節LR	覆土下層
2	高杯?	20.3	(9.7)	—	w(細・粗)	C	灰黄	30	赤彩 口唇貼付文	覆土下層
3	一底部	—	(3.5)	6.3	w(細)	B	鈍橙	25		覆土
4	高杯	—	(3.6)	—	w(細)	B	橙	100	内外面摩耗	覆土下層
5	高杯	—	(6.4)	—	g(細)	B	赤	25	内外面摩耗 被熱痕	覆土
6	壺	—	—	—	w(細)	—	浅黄橙	—	単節RL	覆土
7	壺?	—	—	—	w(細)	—	赤褐	—	単節RL	覆土
8	壺	—	—	—	w(細)	—	灰褐	—	単節RL	覆土
9	壺	—	—	—	b'(細)	—	浅黄橙	—	単節RL 内面ハケメ	覆土
10	壺	—	—	—	w(細)	—	橙	—	単節LR	覆土

第25号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
11	覆土下層	磨石	11.1	6.9	5.2	687.8	閃緑岩	
12	覆土上層	打製石斧?	7.6	5.4	2.4	140.7	ホルンフェルス	

第25号住居跡出土遺物（第67図）

1は推定西壁際の覆土下層から出土した小型の壺形土器である。胴部下半を欠損する。器形は胴部の張りが強く、頸部が短い。口縁部の器壁がやや厚手である。口縁部に2段の突帯を有し刻みが施される。胴部に単節LR縄文が施文され幅広の縄文帯となろうが下端は不明である。2は南壁の覆土下層より出土した。高杯形土器であろうか。杯部は緩やかに外反して口縁部でやや立ち上がる。粘土ヒモ貼り付けによる突帯をもち、口唇部には貼り付け文がつけられる。4単位と思われる。内外面とも丁寧にヘラミガキされ赤彩が明瞭に残る。形態的には壺形土器の口縁部の可能性がある。

11は住居跡南寄りの覆土下層より出土した棒形磨石である。作業面は一部欠損するものの僅かに凸状を呈する。使用痕が明瞭で非常に平滑である。12は打製石斧と思われる。刃部側を欠損するが形態はいわゆるなすび形と思われる。片面に自然面を残す。

弥生時代の土壌（第68図）

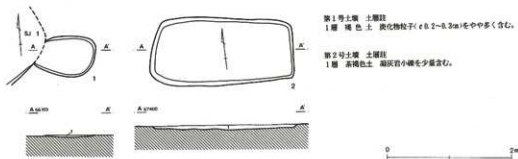
第1住居跡群内において住居跡と同時期の土壌は、第1、2号土壌のみである。ただしいずれも遺物は出土せず、覆土からの判断である。住居跡の遺存状況などから見て、浅い土壌は流出した可能性がある。

第1号土壌

F-16グリッドに位置する。第1号住居跡と極めて近接するが、いずれも流出のため遺存状況が悪く、重複関係は不明である。覆土は単一土層で第1号住の1層土に酷似した褐色土であり、炭化物粒子を少量含んでいた。吉ヶ谷式期の土壌と思われる。遺物は出土しなかった。長径0.85mの不整楕円形である。底面は地山灰褐色土で硬化していなかった。

第2号土壌

G-16グリッドに位置する。長軸2.32m、短軸1.1mの長方形である。底面は凝灰岩を多量に含む灰褐色土の地山面である。遺物は出土していないが、覆土は第2号住居跡の覆土と酷似しているため、吉ヶ谷期の土壌と思われる。もっとも近接する第2号住居跡との関連が想定されるが、主軸方位は2号住のN-76°-Eに対してN-93°-Eとややずれる。

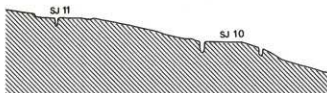
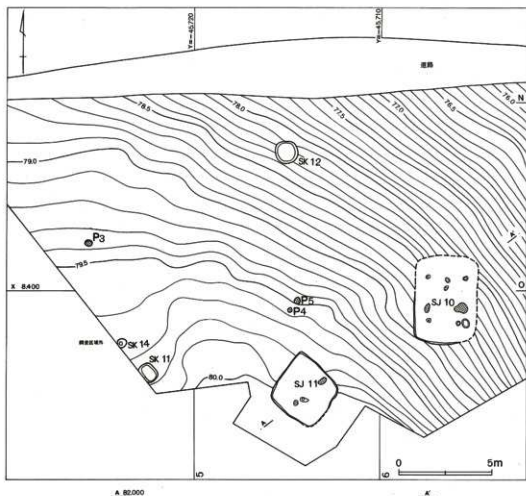


第68図 第1、2号土壌

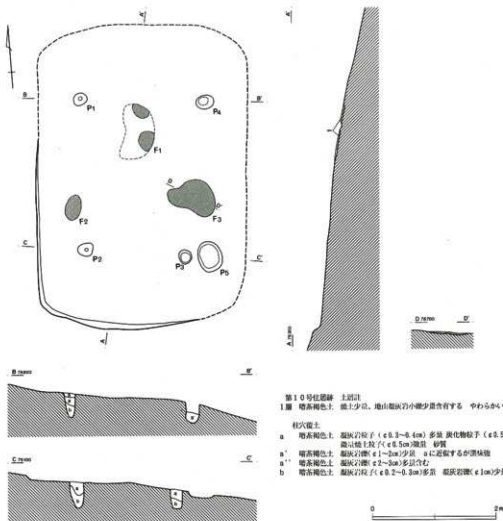
(3) 第2住居跡群の遺構と遺物

第2住居跡群(第69図)は胴分沼南丘陵の尾根線付近に立地する。遺構の検出された標高は78.00~80.00mで、景観としては北丘陵に立地する第1住居跡群を眼下に見おろす高さである。確認はできなかったが、事業地内の蟹沢遺跡も芳沼谷の対岸に見渡せたと思われる。

第2住居跡群は2軒の住居跡、3基の土壌、3基の焼土ピットから構成される。現地形は対水平



第69図 第2住居跡群全測図

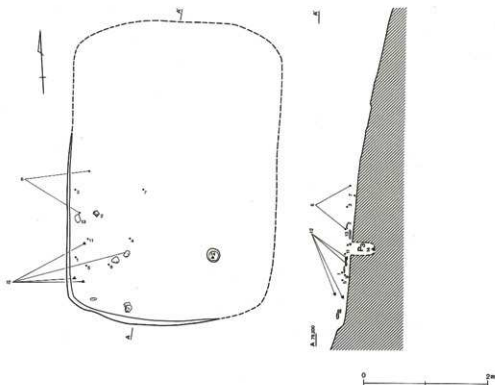


第70図 第10号住居跡

角約8°の急斜面であり、遺構の遺存状況は悪い。なお調査区北側に北丘陵から続く道路が尾根を横切る切り通し状に存在していた。

第10号住居跡 (第70、71図)

第10号住居跡はO-6グリッドに所在する。確認面標高は77.8~79.0mであり、かなり急斜面である。住居跡北東は流出していたが、P1~4の配列から4.9m×3.4mほどの規模と思われる。形態は隅円長方形と思われる。また残存していた南壁はやや外湾していた。主軸方位はおよそN-3°-Eである。



第71図 第10号住居跡遺物出土状況

残存していた南西コーナー付近の床面は、岩盤直上の灰褐色土であった。炉は3基あった。住居跡は主軸に載るF1は上面がすでに流出していたが、硬質の焼土が薄く堆積していた。被熱硬化は南側の方が顕著であった。F2、3はいずれも深さ3cmほどと浅いが被熱硬化は顕著であった。

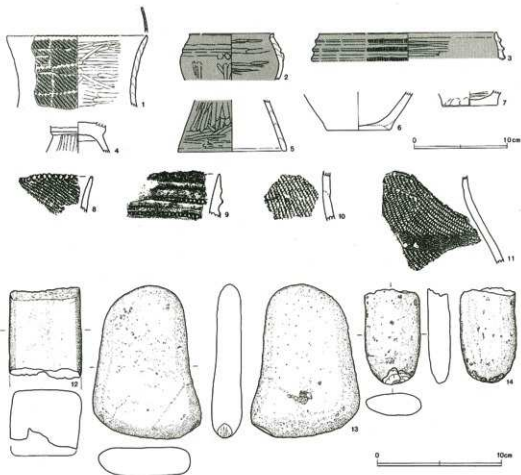
主柱穴はP1～P4の4基である。深さはP1=40cm、P2=43cm、P3=31cm、P4=34cmであるが、床面が遺存していればP3=44cm、P4=44cmと推測される。いずれも岩盤をも掘りこんでいた。またP3の底面(岩盤)には幅5cmほどの工具痕が残っており、覆土下層中から石斧が出土した。P5は径51cm、深さ3cmほどの浅い掘り込みであった。

なお床面が水平であったと仮定すると、F1はおよそ20cmの深さとなる。本遺跡住居跡の炉として他に例がなく、あるいは床面は4°ほど斜面方向に傾斜していた可能性がある。

第10号住居跡出土遺物 (第72図)

遺物は床面の残存する南西コーナー一部の覆土下層を中心に出土した。

2は小型の無頸壺形土器と思われる。胴部下半以下を欠損する。胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口唇部が短く外反する。輪積痕利用の2段の突帯を有する。突帯直下に1対の円形貼り付け文をハの字に配する。内外面とも赤彩される。3は高杯形土器の口縁部である。3段の突帯を有し刻みが施される。口縁部は外反しない。



第72図 第10号住居跡出土遺物

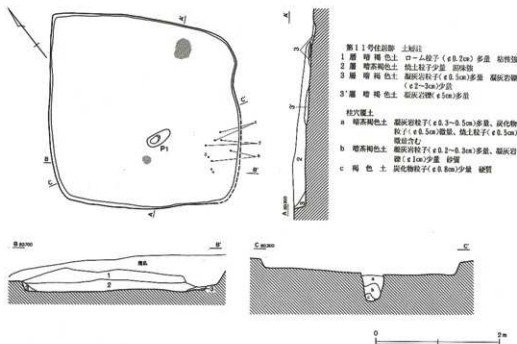
第10号住居跡出土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	甕	15.0	(7.6)	—	b'(細)	B	鈍橙	10	単節RL	覆土
2	壺	9.0	(5.0)	—	b(細)	B	鈍橙	20	赤彩 突帯下貼付文	覆土
3	高杯	19.1	(3.0)	—	b(細)	B	鈍橙	10	赤彩 突帯に刻み	覆土
4	高杯	—	(3.3)	—	w'-w(細)	B	橙	100	接合部に突帯	覆土
5	高杯	—	(5.5)	11.6	w(細)	B	鈍橙	10	赤彩	覆土
6	一底部	—	(4.1)	6.6	g(粗)(黒)	C	鈍橙	25	内外面摩耗	覆土
7	一底部	—	(1.6)	5.8	w(細)	C	鈍橙	100		覆土
8	甕	—	—	—	w(細)		黒		単節RL	覆土
9	壺	—	—	—	b(細)		褐		突帯に刻み	覆土
10	甕	—	—	—	w(細)		鈍橙		単節RL	覆土
11	壺	—	—	—	b(細)		橙		赤彩 単節RL	覆土

第10号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
12	覆土下層	砥石	7.3	5.8	4.7	392.4	頁岩	
13	覆土下層	磨石	12.3	8.7	2.3	365.0	砂岩	
14	P3中	石斧	7.6	4.4	1.7	111.1	砂岩	基部欠損

12は礫石である。断面方形の端整な柱状を呈する。作業面に使用痕が明瞭に残る。13は西壁直下より出土した磨石である。14は石斧である。P3覆土下層より出土した。やや扁平な礫を用い両面とも自然面残る。刃部に剝離痕が認められる。



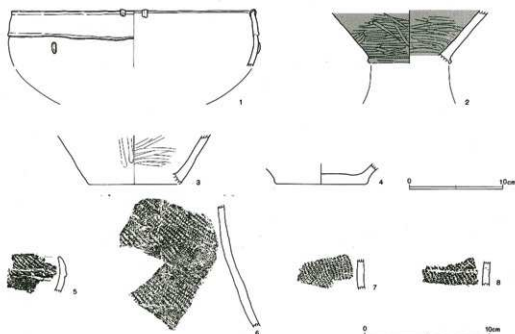
第73図 第11号住居跡

第11号住居跡(第73図)

第11号住居跡はO-5グリッドに所在する。確認面標高は79.8~80.0mである。当初調査区内には北西コーナーのみプランが検出できたため、調査区を部分的に拡張した。しかし調査区外はすでに造成工事が及んでいた影響もあり、上層はほとんど攪乱土であった。しかしやや不整の方形の住居跡が検出できた。規模はおよそ3.1m×3.0mである。主軸は判然としないが、南北軸方位はN-36°Eである。

床面は凝灰岩直上の灰褐色土と考えられるが、造成工事の影響と木根攪乱により遺存状況は極めて悪かった。全体に岩盤が露出している状態で堅緻面や貼床はまったく認められなかった。2か所から比較的焼土がまとまって検出できたが、軟質であり熱硬化も認められなかった。柱穴は中央南寄りから1基検出した。上端は長径43cmの楕円形で、深さは49cmである。凝灰岩をほりこんだ非常にしっかりしたものであった。

第11号住居跡出土遺物(第74図)



第74図 第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土土器観察表

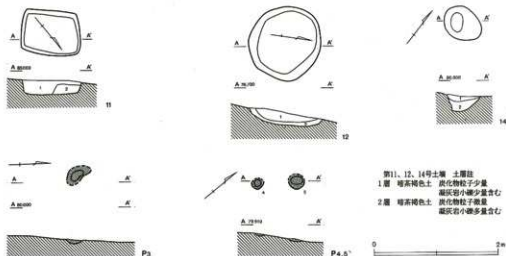
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他		
1	高 杯	26.2	(6.0)	—	w(西)・v(西)	B	鈍橙	25	杯部	口唇部に貼付文	覆土下層
2	高 杯	—	(5.4)	—	b' (細)	A	赤褐	25	赤彩	接合部に突帯	覆土下層
3	一底部	—	(5.3)	—	w (細)	B	橙	15			覆土下層
4	一底部	—	(2.2)	9.6	w・b' (細)	B	鈍黄橙	40			覆土下層
5	高杯?				w (細)		鈍橙		半節RL		覆土
6	変				w (細)		橙		半節RL		覆土下層
7	変				g' (粗)		灰白		半節RL		覆土
8	変				w (細)		鈍橙		半節RL		覆土

遺物は南コーナーを中心に少量出土したが、いずれも覆土下層中からのものである。1はやや大型の高杯形土器である。口縁部は輪積痕を下方に押しつけ、折り返し状口縁をなす。また口唇部は小さく外反し貼り付け文を施す。また杯部にも豆瘤状の貼り付け文をもつ。5は高杯形土器もしくは鉢形土器の口縁部である。折り返し口縁で半節縄文RLを施文する。

第2住居跡群 土壌・焼土ピット (第75図)

第11号土壌

O-5グリッド調査区際位置する。確認面標高は79.7mである。0.96m×0.72m、深さ22cmの長



第75図 第2住居跡群土壌・焼土ビット

方形である。確認面で吉ヶ谷式甕形土器の小破片が出土した。底面は岩盤であった。覆土には炭化物粒子が含まれていた。

第12号土壌

N-5グリッドの道路際に位置する。確認面標高は78.2mである。第2住居跡群の遺構のなかで最北に位置し、他の遺構とはやや離れる。長径約1.2m、深さ30cmの円形である。覆土中より吉ヶ谷期の甕形土器小破片が出土した。

第14号土壌

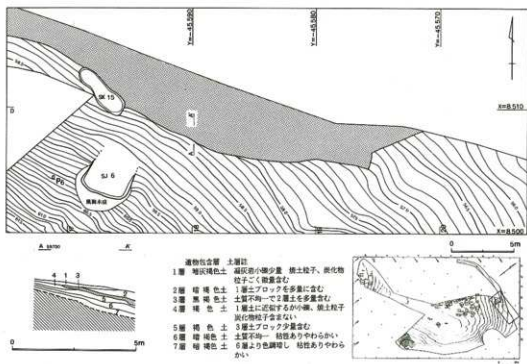
O-4グリッド調査区際に位置し11号土壌と隣接する。長径64cm、深さ31cmの不整楕円形である。覆土は11号土壌と類似する。確認面から吉ヶ谷式甕形土器の小破片が出土した。

第3号焼土ビット

N-3グリッドに位置する。確認面標高は79.3mである。被熱硬化は認められず、住居跡の炉と比較すると軟質であった。径44cm、深さ7cmの円形で断面は皿状で浅い。確認面で露出したので掘り込み及び覆土は不明であるが、付近から吉ヶ谷式土器の小破片が検出されたこともあり該期の可能性がある。あるいは住居跡の炉の痕跡であろうか。

第4、5号焼土ビット

O-5グリッドに位置する。確認面標高79.4mで10、11号住のほぼ中間に位置する。4号は径20cm、深さ4cm、5号は径26cm、深さ5cmである。いずれも底面は岩盤であった。付近から遺物は出土しなかった。あるいは住居跡の痕跡だろうか。ただし周辺を精査しても柱穴、ビットなどはなかった。



第76図 第3住居跡群・北遺物包含層

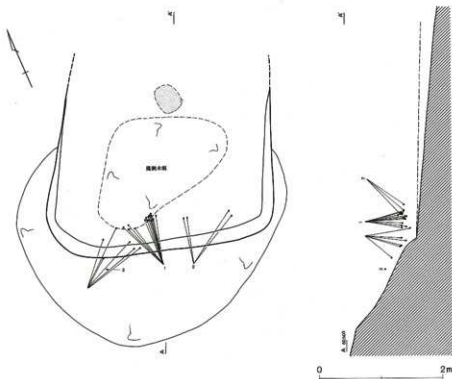
(4) 第3住居跡群周辺の遺構と遺物

第3住居跡群（第76図）は胴分沼北丘陵の裾部にあたる。同程度の緩斜面は西側調査区外にも広がるため、該期の遺構の分布する可能性がある。そこで6号住、15号土壌をもって第3住居跡群としたい。なお第2住居跡群同様に焼土ピットが存在するが、覆土と焼土の鮮度から該期の遺構ではないと思われる。6号住は第1住居跡群北端の8号住、25号住とは直線距離で約20m離れており、床面の比高差もおおよそ6mほどある。第2住居跡群の11号住との比較にいたっては床面比高差で20mにもなる。

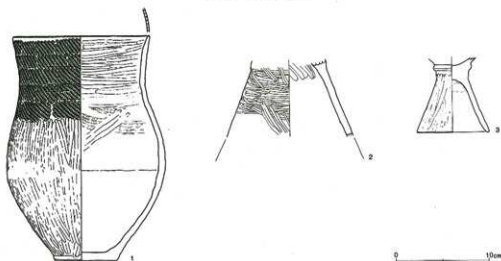
第6号住居跡（第77図）

第6号住居跡はD-17グリッドに位置し、確認面標高は59.3～59.7mである。原地形で丘陵裾部にあたり、北側の包含層との距離は5mと近接している。また該期の土壌の15号土壌とは約2.5mと隣接する。住居跡はほぼ全面にわたり風倒木の影響を受けており、さらに北側が流出していたため遺存状況は極めて悪かった。

残存部の床面は地山灰褐色土であったが、わずかに南壁周辺に限られる。また柱穴などは床面の断ち割りを実施したがなかった。わずかにほぼ中央に焼土粒子の集中が見られた。残存がわずかに南壁周辺に限られ、柱穴も検出されなかったことから東西軸長3.5m前後、南北軸方向はN-21°-E程としか住居跡の規模、形態については言及できない。



第77図 第6号住居跡



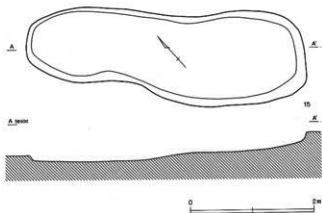
第78図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	14.7	24.2	6.4	灰(粗)	B	鈍黄橙	80	単節RL
2	高杯	—	(8.1)	—	灰'(細)	B	橙	25	
3	高杯	—	(8.0)	7.6	灰'(細)	C	浅黄橙	70	接合部に突帯
									覆土上層 覆土上層 覆土上層

第6号住居跡出土遺物（第78図）

遺物は北壁際付近から集中して出土したが、いずれも推定床面よりかなり浮いており、風倒木の影響と思われる。1の甕形土器は胴部中位に最大径をもち頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。わずかに輪積痕を残し単節RL縄文を施文する。胴部および内面調整はヘラミガキである。口縁部の刻み原体は摩滅しており不鮮明だが、ハケメ状工具と思われる。2、3は高杯脚部である。2は比較的大型で、外面に丁寧なヘラミガキを施す。3はやや小型である。裾部がわずかに広がり、接合部に突帯を有する。なお杯部はまったく出土していない。第77図の番号が付されていないドットは壺形土器の胴部破片であり図化できなかったものである。



第79図 第15号土壌

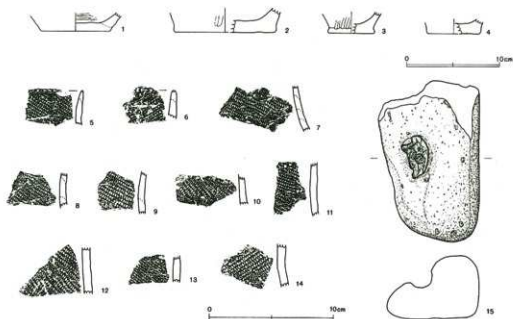
第15号土壌（第79図）

第15号土壌はC-14グリッドの調査区際に位置する。確認面標高は58.5mである。長軸4.5m、短軸1.5m、深さ44cmのやや中央がくびれた不整長方形である。底面がくびれ部を起点にやや西側に傾斜するが、重複関係は認められず1基の土壌である。近接する北遺物包含層とわずかに重複していたが新旧関係は不明であった。覆土は該期特有の暗褐色土で、焼土粒子を覆土下層に多く含有していた。底面は一部岩盤となるが、大半は小礫の混じる灰褐色土面であった。吉ヶ谷期の土器片が覆土上層から少量検出されたが、図化できるものはなかった。

北遺物包含層（第76図）

北遺物包含層は地形的にみると、池ノ頭沼を谷頭とする支谷に面した胴分沼北丘陵北裾部にあたる。現在は池ノ頭谷から長沼谷にかけては池ノ頭沼を水源とした谷戸田として利用されている。なお現地地形はすでに区画整理済みで現水田面と包含層上層との比高差は2m近くある。

包含層は調査区際の狭い範囲に限られる。ここも南包含層と同様に出土遺物のほとんどは集落と同時期と思われる。ただし土層を観察すると、南包含層のようなシルト層がなく、斜面からの堆積土が基本と思われる。



第80図 北遺物包含層出土遺物

北遺物包含層出土土器観察表

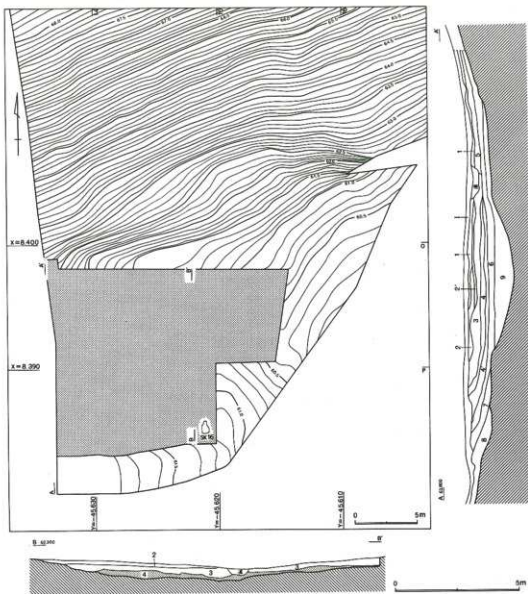
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	一底部	—	(2.0)	7.4	w(細)	C	鈍黄橙	60	半節RL 半節LR 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節RL 半節LR
2	一底部	—	(2.6)	10.6	g(確)	B	橙	15	
3	一底部	—	(2.3)	4.8	g'(細-粗)	C	鈍黄橙	20	
4	一底部	—	(1.6)	5.4	w*(細)	C	灰白	20	
5	甕				b*(細)		明赤褐		
6	甕				w(細)		鈍黄橙		
7	甕				g*(細)		鈍橙		
8	甕				w(細)		橙		
9	甕				g(粗)		浅黄橙		
10	甕				w(細)		暗赤褐		
11	甕				w(細)		明赤褐		
12	甕				g'w(細)		鈍橙		
13	甕				w(細)		鈍橙		
14	甕				w(細)		浅黄橙		

北遺物包含層出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
15	上層	凹石	12.9	8.1	4.9	766.9	閃緑岩	

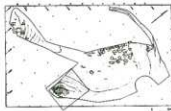
北遺物包含層出土遺物 (第80図)

南包含層に較べ、出土遺物の総量は少ない。出土傾向としてはD-18グリッド付近がやや多かった。出土遺物を第1住居跡群からの流れこみと仮定するとやや東に偏る。出土層位は3層の黒褐色土を中心に確認面までである。なお少量の縄文式土器、近世陶器なども出土したが総体としては非常に少ない。土器の器面の摩耗は著しく図化できたものは少ない。15は上層より出土した凹石である。

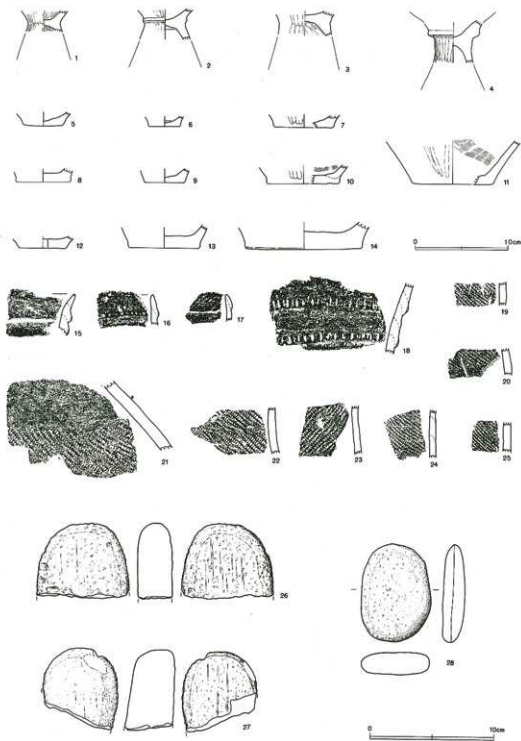


南遺物包含層 土層注

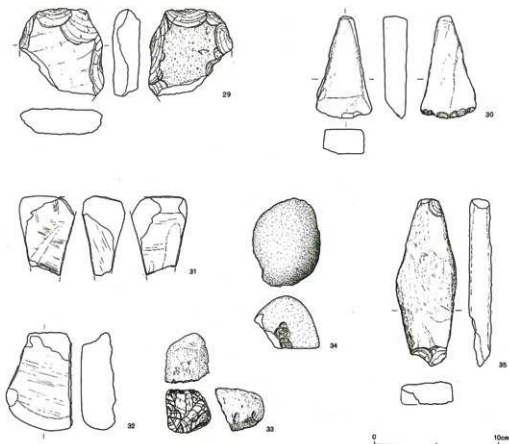
- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| 1 層 新 作 土 | 凝灰岩小礫 (φ 0.8cm) 多量、凝灰岩 (φ 2cm) 多量含む |
| 2 層 灰褐色土 | やや砂質 |
| 3 層 黒 色 土 | 凝灰岩小礫少量、凝灰岩少量含む |
| 4 層 暗褐色土 | 凝灰岩小礫多量、凝灰岩少量含む |
| 5 層 暗褐色土 | 凝灰岩少ない |
| 6 層 黒 色 土 | 凝灰岩小礫少量含む |
| 7 層 黒 色 土 | 凝灰岩小礫多量、凝灰岩多量含む |
| 8 層 赤褐色土 | 粘土粒子微量含む |
| 9 層 赤褐色土 | 軟質 地山に近似 |
| 10 層 赤褐色土 | 硬質 凝灰岩小礫、凝灰岩少量含む |
| 11 層 灰褐色シルト | 粘性強し、凝灰岩小礫少量含む |



第81図 南遺物包含層



第82图 南湾物包含層出土遺物 (1)



第83図 南遺物包含層出土遺物 (2)

(5) 南遺物包含層 (第81図)

地形的にみると、集落跡が検出された馴分沼北丘陵の南裾部、および同北丘陵との間の長沼谷の支谷部分にあたり、遺物の出土した標高はおよそ60mである。この支谷は東側の長沼谷に向かって開口するが、長沼谷に位置する大野田遺跡の低地部からは中・近世、平安時代等の遺物が僅かに出土しているが、弥生～古墳時代の遺物は出土していない。第1住居跡群とは急斜面を挟んで比高差はおよそ6mある。数年前までは水田ではなく桑畑として利用されていたそうである。

調査に及んで、その立地から水田跡なども期待して精査に努めたが、畝畦跡などは存在せず、覆土を観察したところ、鉄およびマンガン斑などの水平堆積などは認められなかった。

またこの支谷の埋没段階については、弥生時代の遺物が主に出土した第4層までの段階に既に現地形に近い状況まで埋没し、第2層段階ではほぼ埋まりきったと考えられる。断面にかかっている溝は上層から掘り込まれており、現代の所産と思われる。北包含層と比較すると土壌に違いが認められるが、地形的要因によると思われる。包含層を壊す形で第16号土壇が存在する。

南遺物包含出土遺物 (第82、83図)

吉ヶ谷式土器がO-14、15グリッドの支谷域を中心として出土した。南調査区際はごくわずかの出土であり、第1住居跡群からの流れこみが主体を占めるようである。また縄文式土器、時期不明土

師器などもごく少量出土したが、出土層位に明確な上下関係はなかった。概して土器の器面は摩耗著しく、図化できたものは少ない。29は小型の短冊形の打製石斧と思われる。刃部側の半分を欠損する。扁平な礫を用い側面に調整が加えられる。片面に自然面が残る。30は柱状片刃石斧と思われる。刃縁部、基端部ともにやや丸みを帯びる。全面に研磨痕が残るが、側面はやや平滑さに欠ける。また刃こぼれと思われる剥離痕が平坦面側刃縁に明瞭に残る。31、32は砥石である。両者とも擦痕が明瞭である。33は石核である。チャート製。34は球形の敲き石である。35は両端部に剥離痕のある石器である。扁平な礫を用い、両面に自然面残るが、菱形の端整な形態である。

南遺物包含層出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高杯	—	(2.3)	—	w(細)	B	鈍橙	100	
2	高杯	—	(3.3)	—	w(細)	C	浅黄橙	90	内外面摩耗 接合部に突帯
3	高杯	—	(2.7)	—	b-w(細)	B	橙	100	内外面摩耗
4	高杯	—	(4.6)	—	g(粗)	B	橙	100	内外面摩耗 接合部に突帯
5	一底部	—	(1.5)	4.2	w(細)	C	鈍黄橙	25	
6	一底部	—	(1.1)	3.2	w(細)	C	浅黄橙	100	ミニチュア?
7	一底部	—	(1.4)	6.1	w(細)	C	鈍黄橙	40	
8	一底部	—	(1.5)	5.6	w(細)	C	灰白	70	
9	一底部	—	(1.5)	4.2	g-w(細)	B	橙	100	
10	一底部	—	(2.0)	7.6	g(粗)	B	鈍橙	40	
11	一底部	—	(4.7)	8.6	w(細)	B	鈍黄橙	20	内面ハケメ
12	甕	—	1.3	4.9	f(細)	B	橙	100	孔径1.2
13	一底部	—	(2.5)	7.4	w(細)	B	橙	100	
14	一底部	—	(3.0)	12.4	g'(粗)	B	鈍橙	90	不整な楕円形
15	壺	—	—	—	w(細)	—	橙	—	突帯、口唇に刻み
16	高杯	—	—	—	w(細)	—	鈍橙	—	突帯に刻み
17	鉢	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単筋RL?
18	壺	—	—	—	w'(細)	—	橙	—	突帯に刻み
19	甕	—	—	—	b(細)	—	暗褐	—	単筋RL
20	甕	—	—	—	w(細)	—	暗褐	—	単筋RL
21	壺	—	—	—	s-w'-g'	—	褐灰	—	単筋RL
22	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単筋RL
23	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単筋LR
24	甕	—	—	—	g'(粗)	—	明黄褐	—	単筋RL
25	甕	—	—	—	b'(細)	—	鈍黄橙	—	単筋RL

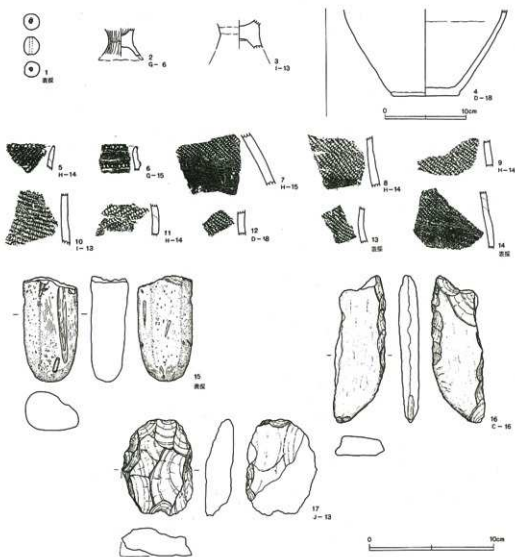
南遺物包含層出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
26		磨石	6.0	7.4	2.8	204.3	閃緑岩	
27		磨石	6.4	6.0	3.9	199.2	閃緑岩	
28		磨石	7.8	5.6	1.8	142.1	砂岩	
29		打製石斧	7.0	6.7	2.0	152.1	片岩	
30		片刃石斧	8.2	4.5	1.9	89.1	砂岩	
31		砥石	6.3	4.4	3.4	96.9	凝灰岩	
32		砥石	7.9	5.3	2.8	166.5	硬砂岩	
33		石核	3.9	3.5	3.5	62.1	チャート	
34		敲き石	7.1	5.4	4.2	202.2	砂岩	
35		敲き石?	13.3	4.8	1.8	152.2	片岩	

(6) グリッド出土・表採遺物(第84~87図)

本遺跡において弥生時代後期の住居跡、土壇以外から出土した該期の遺物は、遺構外から出土したもの、時期不詳の井戸跡、土壇から出土したものがある。

第84図は表採した遺物である。1は第1住居跡群内から表採した土玉である。22号住出土の土玉と重量、焼成度合、胎土とも近似する。2は3号住と4号住の間から出土した高杯形土器のミニチュアの脚部である。15は第1住居跡群北東側の斜面から表採した有溝砥石である。軟質の砂岩製で最大幅約6mmの溝があるが、溝両端は先細りとなる。溝の断面形は半円形である。16は片岩製の扁平な石器である。側縁に剥離が認められる。両面に自然面を残し、先端に擦痕が認められる。17は片岩製の小型の打製石斧であろう。刃部が欠損する。

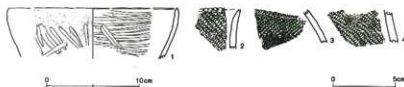


第84図 グリット出土・表採遺物

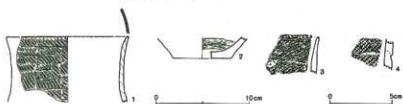
第85図は時期不詳の第1号井戸跡の出土遺物である。遺構の重複関係から第20、22号住居跡のいずれかに帰属する可能性がある。第86図は時期不詳の第8号土壌の出土遺物であり、同じく第20、22号住居跡に帰属する可能性がある。第87図は第6号土壌の出土遺物で第15号住居跡に帰属する可能性がある。



第85図 第1号井戸跡出土遺物



第86図 第8号土壌出土遺物



第87図 第6号土壌出土遺物

グリット出土・表採土器観察表

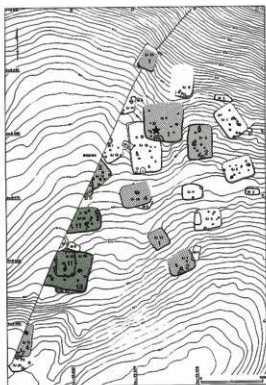
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	土玉	長径1.5		短径1.2	w'(細)	B	橙	100	表採 孔径0.2
2	高杯	—	(2.2)	—	w(細)	A	明赤褐	100	G-16 ミニチュア
3	高杯	—	(2.3)	—	wg(細)	B	橙		I-13
4	甕	—	(10.5)	7.8	w(細)	B	橙	30	D-18
5	甕				sw(細)	B	鈍橙		H-14 単節LR
6	高杯				wb(細)	C	橙		G-16 突帯に刻み
7	壺				sw(細)	B	灰白		H-15 単節RL
8	甕				w'(粗)	A	鈍橙		H-14 単節RL
9	甕				wb(粗)	B	褐		H-14 単節RL
10	甕				w'(細)	C	鈍橙		H-13 単節RL
11	甕				wg(細)	B			H-14 単節LR
12	甕				b'(粗)	C			D-18 単節RL
13	甕				w'(粗)	C			表採 単節RL
14	甕				sw'(細)	C			表採 単節RL

グリット出土・表採石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
15	表採	有溝砥石	8.4	4.4	3.1	202.6	砂岩	
16	C-16	敲き石	11.8	4.2	1.5	120.0	片岩	側縁に刺刺痕
17	J-13	打製石斧	7.7	5.7	2.2	121.0	緑泥片岩	

第1号井戸跡・第8・6号土壇出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕				uw'(細)		鈍黄橙		第1号井戸跡 単節LR 内面赤彩
2	甕				wg(細)		橙		第1号井戸跡 単節LR
3	甕				w(細)		橙		第1号井戸跡 単節LR
4	甕				wg'(細)		黒褐		第1号井戸跡 単節RL 内面ハケメ
5	甕				w(細)		鈍橙		第1号井戸跡 単節RL
6	甕				w(細)		明黄褐		第1号井戸跡 単節LR
1	鉢	18.0	5.4	—	g'(粗)	B	橙	15	第8号土壇 外面ハケメ→雑なミガキ
2	甕				w(細)		鈍黄橙		第8号土壇 単節RL
3	甕				b'(細)		鈍橙		第8号土壇 単節LR
4	甕				w(細)		黒褐		第8号土壇 単節RL(太細燃合せ)
1	甕	13.2	(7.0)		w(細)		褐	15	第6号土壇 単節RL 内面摩耗
2	一底部		(2.3)	6.1	w'(粗)		灰褐	25	第6号土壇 内外面摩耗
3	甕				bw(粗)		橙		第6号土壇 内外面摩耗 単節LR
4	甕				g(細)		褐		第6号土壇 単節LR



第88図 縄文時代遺物分布図

3. その他の遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺物

本遺跡からは縄文時代の遺構は検出されなかったが、主に弥生時代住居跡の覆土から縄文時代早期～中期の土器が出土した。縄文時代の遺物の分布は第88図の通りである。特に調査区際第19、20、22号住居跡から多く出土しており西側調査区外に遺構が存在するのかもしれない。

なお先述したように事業地内の尺尻遺跡からは諸磯b式期の住居跡1軒、尺尻北遺跡からは諸磯c式期の住居跡が1軒検出されている。また近接する大野田遺跡も遺構は検出されていないが早期、前期、後期の土器片と該期の石器が少量出土している。

土器

第Ⅰ群土器（第89図1～7）

早期の土器群を一括した。特徴によってさらに2分される。

A類（第89図1～4）

沈線文系の土器群である。断面凹線状の沈線でモチーフが描かれ、同一工具による刺突や押し引きが付随する。1～3は文様・胎土などから同一個体と考えられる。

B類（第89図5～7）

いわゆる明神裏式と考えられる土器群である。ペン先状の連続押捺によって文様が描かれる。5は口縁部破片で、口唇上にも同様の押捺がめぐる。胎土には小礫・砂粒が多く、赤褐色の特異な色調で、他とは明確に分離される。

第Ⅱ群土器（第89図8～15）

条痕文系の土器群を一括した。8は文様から鶴ヶ島台式と考えられる。他は条痕のみ。全て胎土には繊維が含まれる。

第Ⅲ群土器（第89図16～25）

前期中葉の土器群である。いずれも半截竹管文を基調とし、17～18は縄文地上に文様が描かれ、諸磯a式であろう。20は連続した小波状文をもち、地文に原体Lの縄文を持つことから、いわゆる東関東的な要素が見てとれる。20は沈線間に連続爪形文が施文された諸磯b式である。

第Ⅳ群（第89、90図26～56）

前期末葉の土器群を本群とした。特徴から3分される。

A類（第89図26～46）

諸磯c式土器である。26に代表されるように、大型貝殻状と刺突をもつボタン状貼付を配置し、装飾性に富んでいる。貼付下の沈線が本来の文様であり、口縁では斜行する場合が多いようである。26・27を除く全てが胴部破片で、文様構成が定かでないが、43の如く、縦区画を基本とし、区画間に矢羽根状や弧状の沈線文が配される。胴部文様上にも貼付が施される。

B類（第89図47～52）

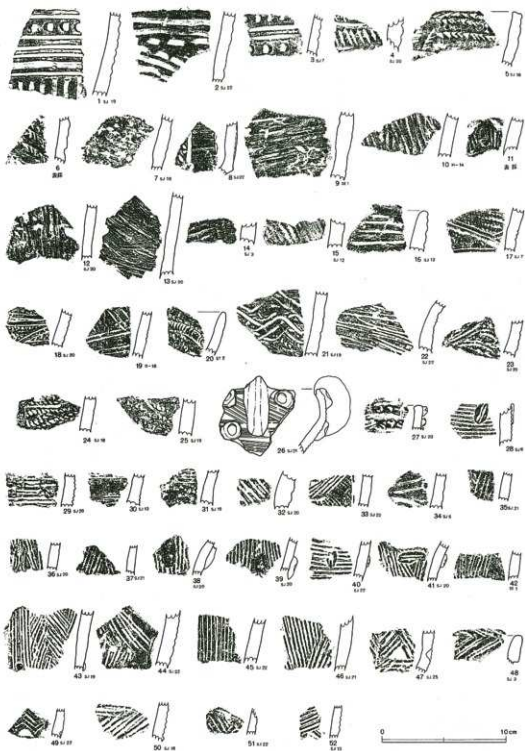
三角印刻が多用される土器群で、広義十三菩提式に含まれる。横帯内に描かれた鋸歯文の空白部が印刻されている。

C類（第90図53～57）

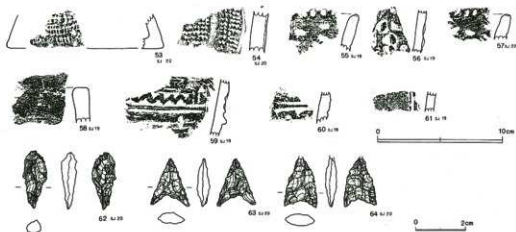
興津式に代表される土器群である。貝殻腹縁の連続押捺によって曲線的なモチーフが描かれる。54のように、間に沈線が加えられることも特徴と言える。53～54は興津Ⅱ式と考えられる。55～57は刺突文をもつ一例で、口唇上にも刺突がめぐる。興津Ⅱ式に伴出する土器群であろう。

第Ⅴ群（第90図58～61）

中期初頭の土器群を一括した。文様施文の在り方から、五領ヶ台式と考えられる。



第89圖 縄文時代遺物 (1)



第90図 縄文時代遺物 (2)

石器 (第90図62～64)

本遺跡から出土した縄文時代の石器は図示した3点で全てである。いずれも第20、22号住居跡を壊す風倒木痕から出土した。62は表裏両側からの剥離で形状を作出した石器でドリルである。63、64は石鏃で63は基部に挟入部をもち長脚気味、64は両側縁が弧状となる。いずれも黒曜石製。

土偶 (第91図)

縄文時代後期初頭の土偶が弥生時代後期の第9号住居跡の覆土上層から1点出土した。遺跡内からは縄文時代後期初頭の資料は出土しておらず、事業地内遺跡を含めて周辺の遺跡からも同時期の資料はほとんど見つかっていない。したがって、なんらかの事情で同遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

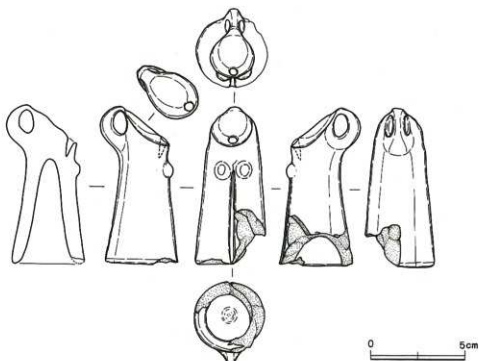
土偶は高さ約8cm、最大径約4cmのほぼ完形のもので、「筒型土偶」の一種と考えられる。底部がラッパ状に開口した珍しい例で、やや裾広がりの筒状の胴部に斜め上方を向いた顔が表現されている。土偶の頭部と胴部は一体化しており、四肢の表現は省略されているが、全身像と考えられる。胴部は無文で、乳房と正中線のみが表現されている。

顔の輪郭は楕円形で長さ2.7cm、幅2.2cmほどである。眉や目・鼻は省略され、口は頬から顎にかけてのわずかなふくらみの中心に、径0.5cm、深さ1.3cmほどの刺突で表現されている。顔の上端から後頭部にかけてアーチ状の把手が付けられている。

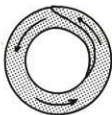
乳房は径0.9cm、高さ0.3cmほどの膨らみで表現されている。粘土の貼りつけではなく、胴部の粘土を掻き出すようにして形作られたと考えられる。また、正中線は両方の乳房の中心から胴部下端まで力強い沈線で表現されている。

胎土は緻密で焼きも良く、胴下半部の壊れている部分の観察から、板状に延ばした粘土を矢印方向からかぶせるようにして巻き付け、整形したことがわかる (第92図参照)。

筒型土偶の特徴として、①頸部以下が円筒形で、空洞になること、②四肢が省略され、③顔面が



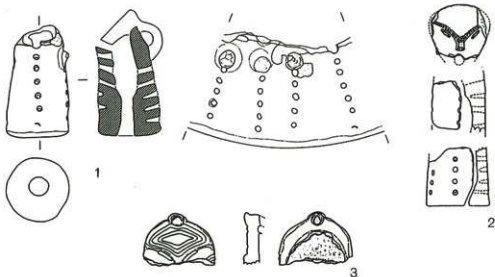
第91図 大野田西遺跡出土土偶



第92図 土偶の製作方法模式図

斜め上方を向くこと、④後頭部から胴上部にかけてアーチ状の把手が付けられること、⑤座りが良くそれ自体で自立することなどいくつかの共通する要素をあげることができる。また、胴部には沈線や流帯、連続する円形の刺突列などで文様が施される場合もある。

当遺跡の土偶をこれらと比較すると、①～⑤いずれの要素にもあてはまることが分かる。無文で、口・乳房・正中線のみが表現された非常にシンプルなものだが、筒型土偶の一例であると断定してさしつかえないと考える。



第93図 県内出土の筒型土偶

1. 川越市上組Ⅱ遺跡 (S=1/3) 2・3. 川越市賀々良遺跡 (縮尺不同)

土偶の所属時期は、筒型土偶が関東地方から中部地方の一部の堀之内式期に伴う土偶と考えられていることから、縄文時代後期堀之内式に伴うものであると考えられる。ただ、単独出土であること、土偶自体が無文で時期を決定する要素に乏しいことから、堀之内式1式であるとか、堀之内式2式であるかの断定は避けておきたいと考える。

県内では、本例も含めて三例の「筒型土偶」が見つかっているが(註1)、他の二例は川越市の隣接する二遺跡からみついている。川越市内出土の二例は、円形の刺突列で文様が施されるもので、上組Ⅱ遺跡例などは、胴部が空洞というよりも孔が貫通しているという趣のものである。

底部が完全に開口している例としては群馬吾妻郡中之条町壁谷遺跡出土例や神奈川県横浜市三ツ沢出土例などが挙げられるが、特に壁谷遺跡例は開口部がややラッパ状に開いている。しかし、口を表す刺突は二例とも胴部の空洞に達しており本例とは異なる。また、壁谷遺跡例は後頭部にアーチ状の把手が付いていない点も異なる。

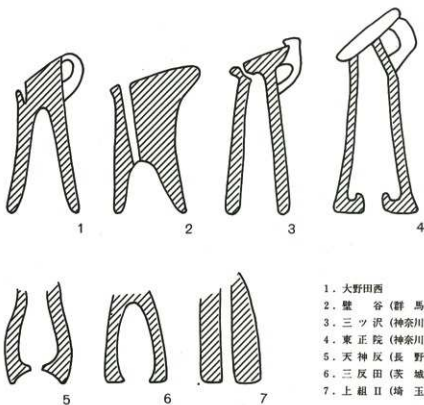
「筒型土偶」の出土は、地域的にも時期的にも限られているため、いまだに三十例に満たないようである(註2)。

(浜野美代子)



第94図 筒型土偶類例

1. 群馬県壁谷遺跡例 (S=1/2) 2. 神奈川県三ツ沢遺跡例 (縮尺不同)



1. 大野田西
2. 壁谷 (群馬)
3. 三ツ沢 (神奈川)
4. 東正院 (神奈川)
5. 天神反 (長野)
6. 三反田 (茨城)
7. 上組Ⅱ (埼玉)

第95図 筒型土偶の断面形態のバリエーション

註

- (註1) 植木1990で、県内の例として本例(大野田西遺跡例)以外に五例ほどあげられているが、今回図示した二例(第93図1・2)以外は筒型土偶として認め難い。なお、賀ケ良遺跡の顔面破片だけの土偶(第93図3)は筒型土偶の可能性もあるが、これだけでは断定できないのであえてはしした。
- (註2) 鈴木1990で、筒型土偶が三十例未満であることが指摘されたが、現在も状況は変わっていない。

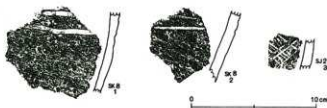
参考文献

- 植木 弘 1990 「土偶の型式と系統について～東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって」 埼玉考古27号
- 江坂輝彌 1960 「土偶」 校倉書房
- 黒坂楨二 1989 「上組II」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第80集
- 鈴木保彦 1990 「筒型土偶」 『特集一縄文土偶の世界』 季刊考古学第30号

(2) 弥生時代中期の遺物(第96図)

大野田西遺跡からは弥生時代中期後半に比定できる土器片が3点出土した。1、2は第8号土坑覆土中、3は第2号住居跡の覆土上層からの出土であり、いずれも混入である。

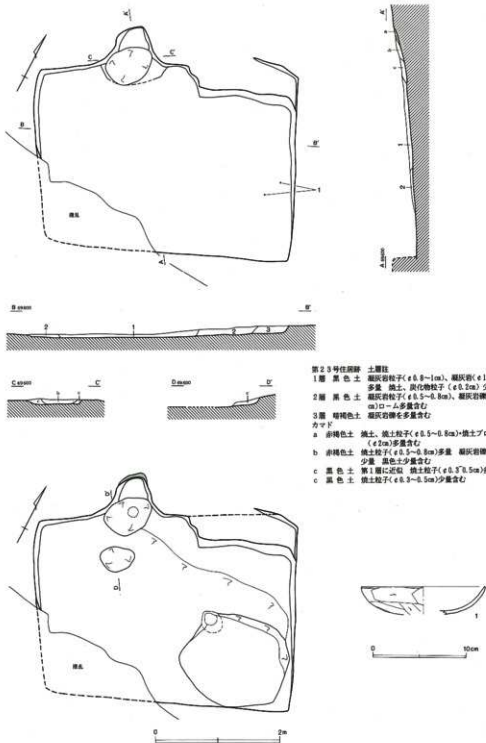
1は甕形土器の胴部下半と思われる。やや蛇行する幅0.4cmのヘラガキ沈線が認められる。2も同様で、幅0.2cmのヘラガキ沈線が横位に施される。3は櫛歯状沈線が施される。3点とも色調は赤褐色で焼成は良好である。胎土に石英を多量に含む。



第96図 弥生時代中期の遺物

(3) 奈良時代の遺構と遺物

本遺跡では、弥生時代後期の住居跡の他に、奈良時代の住居跡が1軒検出された。出土遺物は僅かであったが、8世紀末～9世紀初頭の所産と考えられる土師器の杯が出土した。事業地内遺跡においては、蟹沢、芳沼入遺跡において同時期の住居跡がそれぞれ3軒ずつ確認されている。



- 第23号住居跡 土層柱
- 1層 黒色土 腐炭屑粒子($\phi 0.8 \sim 1\text{cm}$)、腐炭屑($\phi 1 \sim 2\text{cm}$)
多量 焼土、炭化物粒子($\phi 0.2\text{cm}$)少量
- 2層 褐色土 腐炭屑粒子($\phi 0.5 \sim 0.8\text{cm}$)、腐炭屑塊($\phi 1\text{cm}$)ローム多量含む
- 3層 暗褐色土 腐炭屑塊を多量含む
- カマド
- a 赤褐色土 焼土、焼土粒子($\phi 0.5 \sim 0.8\text{cm}$)・焼土ブロック($\phi 2\text{cm}$)多量含む
- b 赤褐色土 焼土粒子($\phi 0.5 \sim 0.8\text{cm}$)多量 腐炭屑塊($\phi 1\text{cm}$)少量 黒色土少量含む
- c 黒色土 第1層に近似 焼土粒子($\phi 0.5 \sim 0.5\text{cm}$)多量
- c 黒色土 焼土粒子($\phi 0.3 \sim 0.5\text{cm}$)少量含む

第97図 第23号住居跡・第23号住居跡出土遺物

第23号住居跡・第23号住居跡出土遺物（第97図）

第23号住居跡はK-15グリッドに位置する。胴分沼北丘陵のほぼ尾根線上にあたり、確認面標高は69.4mである。南遺物包含層へ続く急斜面への地形変換点にもあたる。

現地形では急斜面であるため、覆土はほとんど残っていなかったが、ほぼ中央に黒色土が堆積していた。西側は岩盤が露出していた。住居跡の規模は南壁が不明瞭だが、4.16m×2.9m程の横長方形と思われる。主軸方位はN-26°-Eである。床面は岩盤直上の灰褐色土であったが、流出により確実な堅緻面は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴はなかった。カマドは攪乱と流出により燃焼部底面に近いと思われる。少量の焼土を残すのみで据はなかった。またカマド東側に攪乱で不明瞭だが、棚状の段があった。堀り方は南東コーナー部およびカマド前面が、不整円形に窪んでいた程度であった。

第23号住居跡出土土器観察表

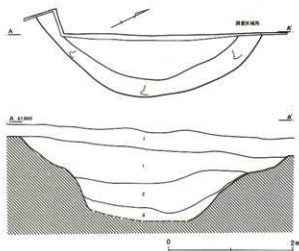
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	杯	13.1	(3.0)	—	S・W・B(量)	C	黄褐	25	床直

（4） その他の遺構

第1号井戸跡（第98図）

H-13グリッドに位置する。調査区際に位置し、完掘していない。20、22号住を一部壊していた。平面形態は、直径5m前後の不整円形と思われる。断面形態は上方で緩やかな肩をもつ。

出土遺物は吉ヶ谷式土器が上層から少量出土した(第85図)。埋没時の混入と思われる。なお本遺構周辺は、調査区内でもっともロームが堆積している部分で、岩盤に至るには確認面から2m前後ある。湧水レベルまで調査できなかったが、岩盤を掘り込んでいると思われる。帰属時期は不明である。



- 第1号井戸跡 土層誌
- 1層 赤土
 - 1層 褐色土 凝灰岩小礫少量含む
 - 2層 黒褐色土 凝灰岩小礫少量含む しまり粘性あり
 - 3層 暗褐色土 小礫含まない やわらかい

第98図 第1号井戸跡

第3号土壌 (第99図)

F-16グリッドに位置する。長軸2.97m、短軸0.99mの不整長方形である。なお北側上端は流出していた。覆土中より多量の炭化材片、焼土粒子が検出され、底面、壁面とも被熱硬化が著しかった。出土遺物がなく時期不詳だが炭焼窯の可能性が高い。

第4号土壌 (第99図)

I-16グリッドに位置し、第7号住居跡を壊す。長軸2.42m、短軸1.12mで確認面からの深さは0.43mである。覆土中より吉ヶ谷式土器が少量出土したが、覆土は弥生時代の遺構のものと明らかに異なり、時期不詳である。

第5号土壌 (第99図)

F-14グリッドに位置し第14号住居跡を壊す。直径約1mの円形である。遺物は出土しておらず、時期不詳である。

第6号土壌 (第99図)

G-14グリッドに位置し、第15号住居跡を壊す。長軸1.83m、短軸1.21m、深さ0.3mの長方形である。覆土中より吉ヶ谷式土器が出土したが(第87図)、覆土は弥生時代と明らかに異なり、時期不詳である。

第7号土壌 (第42図)

G-14グリッドに位置し、第16号住居跡を壊す。大半が調査区外のため形態、規模は不明である。遺物は出土しなかった。時期不詳である。

第8号土壌 (第99図)

H-14グリッドに位置し、第20号住居跡を壊す。長軸2.15m、短軸1.00mの長方形である。覆土中より弥生時代中期の土器と吉ヶ谷式土器が出土したが(第86図)、混入である。時期不詳である。

第9号土壌 (第44図)

H-15グリッドに位置し、第18号住居跡を壊す。掘り込みが浅く、北側は削平のため不明である。遺物は出土しなかった。時期不詳である。

第10号土壌 (第99図)

K-13グリッドに位置する。丘陵の尾根上に立地し平成3年度の試掘時から確認されていた遺構である。1辺およそ1.5mの方形で、底面には岩盤が露出している。微量の焼土粒子が南壁際から検出された。南側に深さ4cmの小ピットが検出された。上層から吉ヶ谷式土器の小片が出土したが、該期にするには確証に欠けるため時期不詳とする。

第13号土墳（第99図）

O-6グリッドに位置する。第10号住居跡から5m下方の斜面上に立地するが、第2住居跡群の土墳と比較すると覆土、掘り方の点で相違がある。遺物は出土しなかった。1.35×0.66mの規模で、深さは0.15mの長方形である。東コーナー部が流出していた。

第16号土墳（第99図）

P-14グリッドに位置し、南遺物包含層上に立地する。径0.7mの円形の掘り込みから針北に舌状の張り出しをもつ。底面直上に炭化物が薄く堆積し、南北の壁面に被熱痕があった。遺物は被熱痕のある自然礫のみであった。火葬墓の可能性はある。

第1号焼土ピット（第99図）

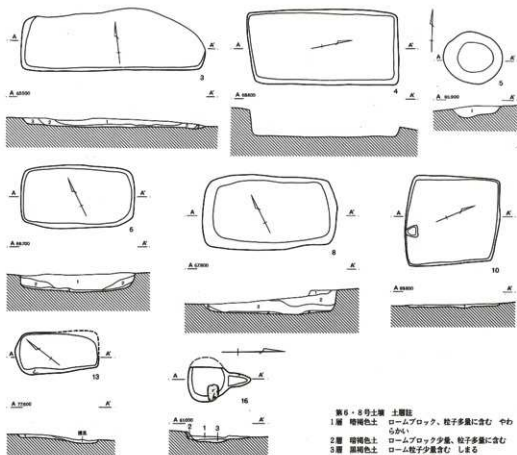
F-17グリッドに位置する。確認面から既に焼土が露出しており、住居跡の炉を想定して付近を精査したが、柱穴などの施設もなく、遺物もなかった。径0.48mの円形の範囲で、かなり軟質の焼土が堆積していた。

第2号焼土ピット（第99図）

J-12グリッドに位置する。第1号焼土ピットと同様に、住居跡を想定したがその他の施設はなかった。また付近から近世陶器などが出土しており、吉ヶ谷式期の遺物はなかった。径0.27mの円形の範囲でやや硬化した焼土が堆積していた。

第6号焼土ピット（第99図）

D-16グリッドに位置する。第1、2号焼土ピットと異なり、径0.3m、深さ0.47mの柱穴状のピットにやや硬質の焼土がおよそ30cm堆積していた。なお下層土は軟質な黒色土で住居跡の柱穴覆土とは明らかに異なる。付近から遺物は出土しなかった。



第3号土層 土層註

- 1層 炭土炭層 炭化物を非常に多量、褐色土ブロック少量含む
- 2層 炭土層 炭化物粒子を多量、焼土多量、褐色土ブロック少量含む
- 3層 炭層 焼土を含む 凝灰岩微量含む

第5・10・13号土層 土層註

- 1層 褐色土 ローム粒子少量、凝灰岩小礫少量含む

第6・8号土層 土層註

- 1層 暗褐色土 ロームブロック、粒子多量を含む やわらかい
- 2層 暗褐色土 ロームブロック少量、粒子多量を含む
- 3層 暗褐色土 ローム粒子少量含む しまる
- 4層 黒色土 ローム粒子微量含む しまる

第11・12・14号土層 土層註

- 1層 暗褐色土 炭化物粒子微量、凝灰岩少量含む
- 2層 暗褐色土 凝灰岩多量含む

第16号土層 土層註

- 1層 炭褐色土 凝灰岩粒子多量含む
- 2層 黒褐色土 炭化材、炭化物粒子多量含む
- 3層 黒褐色土 焼土粒子少量含む



第99図 時期不詳の土坑・焼土ピット

IV 発掘調査の成果と課題

土器

吉ヶ谷式土器の編年については既に柿沼、石岡両氏によって詳しく論じられてきたが、近年の発掘調査の成果による資料増加は目覚ましいものがある。しかし吉ヶ谷式土器の祖型とされる池上遺跡変4類（中島1984）に後続する土器群がまだ発見されておらず、また吉ヶ谷Ⅲ期と「五領」式期との関係も現段階では不分明と言わざるをえない。さらには南関東土器編年案との対比を重視して設定されたⅠ～Ⅲ式の段階設定も再考する必要があると思われる。

さて本遺跡に目を転じると、吉ヶ谷集落としては他に例を見ない住居跡間の重複関係を有している点が挙げられる。しかし再三述べてきた通り、床面直上と認定できる遺物が少なく、器種間のセット関係が把握できるものは僅かである。したがって本遺跡資料のみから編年案を提示することは筆者の不勉強も手伝って困難であるし、根拠も薄弱となってしまう。ただし小片を含め、器種毎にかなりのバラエティーが認められる。したがって本項では先学の業績をもとに、器種毎に概括的な分類を行い、問題点を抽出することを目的とした。

本遺跡出土の吉ヶ谷式土器の器種は、甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器、甌形土器、片口形土器で構成され、さらにミニチュア土器、土製勾玉などの祭祀関連遺物が組成に加わる。吉ヶ谷式土器の系統とは異なる台付甕等が出土した住居跡も数軒ある。また極細文土器も小片であるものの数点出土した。

甕形土器（第100図）

吉ヶ谷式土器の編年基準となる甕形土器は、本遺跡では器形が完全に把握できるものが僅かであり、胴部上半～口縁部が遺存するものは、次の5例のみである。

第3号住居跡1

胴部の張りが強く、頸部はやや直線的に傾斜し口縁部上位が外反する。7段の輪積痕を明瞭に残すが、縄文施文はやや乱れる。

第3号住居跡2

胴部の張りが弱いいわゆる寸胴であるが、頸部から口縁部にかけての移行が明確で、口縁部のみ2段の輪積痕を残す。小型である。

第6号住居跡1

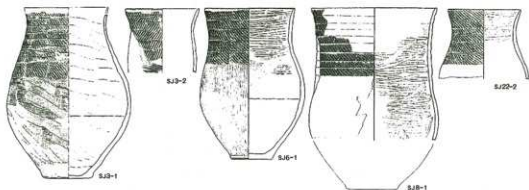
胴部の張りがやや弱く、頸部は直立ぎみに口縁部に移行する。輪積痕はほとんど残さない。

第8号住居跡1

大型。口径と胴部最大径がほぼ同一で、頸部から口縁部にかけての立ち上がりは緩やか。輪積痕（9段）を明瞭に残し、縄文施文は輪積痕に沿って整然としている。

第22号住居跡2

胴部の張りが強く、頸部から口縁部にかけて強く外反する。小型である。



第100図 変形土器類例

次に吉ヶ谷式土器編年においてII期の細分の指標とされる胴部下半の調整技法を見ると、観察しうる個体のほとんどがハケメ調整の後、ヘラミガキを施す。例外としては先に挙げた3号住1、2にハケメ調整が認められる程度である。なお8号住1の内面調整はヘラミガキで光沢を持つに至るが、外面調整はハケメ調整の後にナデ類似の調整を施していると思われる。また外面調整は不明なるも内面にハケメ調整を残すものとして3号住4、19号住2などが挙げられる。

変形土器の編年基準として、胴部の張りが強くなり、それに伴い頸部の外反も強くなることが指摘されている。この器形の基準に照らし合わせると8号住1がより古相と言えるが、胴部のハケメ調整は消されている。逆に3号住1は輪積痕を顕著に残し、胴部調整はハケメを残すが、器形は逆に新相を示していると言える。

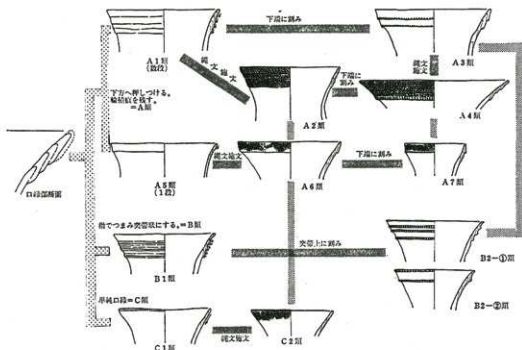
次に施文域について見てみると、口唇部については壺形土器の刻み同様、ハケメ状工具によるもの、縄文施文されるもの、無文の3種があるが3号住4のように部分的に刻みを施すものもある。破片のため全容は不明だが、あるいは坂戸市附島遺跡2号住例のように施文域が一定の間隔をもつ可能性もある。白草遺跡などで出土している口唇部直下の無文帯をもつものは数例（3号住2、26号住1）があるが、それほど明確ではない。

壺形土器（第101図）

壺形土器についても良好な資料が少なく、器形が完全に復元できたものは僅少である。ただし破片を含めると口縁部にかなりのバリエーションが認められる。なお復元できる個体の口径は10～15cm 7例、18～25cm 5例と大きく2大別が可能である。ここでは柿沼氏の壺口縁部類例（柿沼1989）に照らし合わせて概観してみたい。

A類

本遺跡出土のA類は、小破片のものが多く不明瞭と言わざるを得ないが、A4、7類のごとく縄文施文および下端の刻みを具備するものは1号井戸1のみである。貼り付け文を有する15号住16がA類であるが、下端の刻みは不明である。20号住76はA6類である。また口縁部は欠損するものの、



第101図 壺口縁部類例 (柿沼1989より転載)

17号住1はA2類と思われる。なお蟹沢遺跡出土のA類はすべて刻みをもたず、A6類が主体となる。ただし玉太岡遺跡例や花影遺跡例のごとく輪積痕の顕著に残るものは存在しない。

B類

本遺跡出土の壺形土器の主体を占めるが、刻みが施されないB1類は存在せず、すべてB2類となる。これは蟹沢遺跡出土のB類についても同様である点が注目される。またB2類中においても突帯のつまみだが特に顕著なもの（5号住2、15号住4）があり、つまみだがが弱いもの（9号住1、2、3、5）より古相の可能性が指摘できる。

C類

C類については柿沼氏も指摘しているようにA類の変形とも捉えられ、区別が付き難いと言える。19号住39がC2類と思われる。なおC1類の範疇の単純口縁をもつ22号住5は、張りのある胴部から口縁部にかけて大きく外反し、口径と胴部最大径の差が小さい。胴部上半に幅広の縄文帯をもち伝統的な吉ヶ谷式壺の系統とは異なると思われる。類例としては上組II遺跡36号住例が挙げられる。無類壺

本遺跡からは、4例出土しているが、いずれも胴部下半以下は欠損している。またすべて破片のため口縁部の孔の有無は不明である。

A 第19号住居跡6

輪積痕により折り返し状口縁を作成し、口縁上位で外反する。縄文を施文する。

B 第21号住居跡1

口縁部は直立する単純口縁であるが胴部上半に輪積痕利用の突帯を有する。刻みはない。

C 第21号住居跡2

輪積痕利用の3段?の突帯を有し、刻みが施される。胴部は縄文を施文する。

D 第10号住居跡2

輪積痕利用の薄い突帯を有し、胴部に貼り付け文を有する。小型である。

以上、いずれも吉ヶ谷式壺形土器、あるいは高杯形土器の特徴を具備していると言える。A類の類例は霞ヶ関遺跡2次1区3号住例、花影遺跡3号方形周溝墓例、明戸東8号住例、縄文を施文しない大西遺跡62号住例などがあるが、前2者は口縁部に輪積痕を明瞭に残すなどより古相を示し、明戸東例が本遺跡例と近似する。B類は駒掘遺跡例、蟹沢遺跡例が挙げられるが、前者は突帯に刻みを有する。

高杯形土器 (第102図)

本遺跡出土の高杯形土器も壺形土器と同様、完形資料は22号住6の1例のみである。ただし壺形土器同様、口縁部にはかなりのバリエーションが認められ、従来知られている吉ヶ谷式高杯口縁類型の大半が出土したとも言える。ただし第102図中の4、6、7、12~14はいずれも20号住覆土中出土であるように、住居跡単位での段階設定を提示することはできない。今後の他遺跡出土例を含めた分類作業の一助となれば幸いである。なお壺口縁部同様に「突帯」と「折り返し」は、輪積痕のつまみあげの強弱に起因する分類のため、判別し難いものがある。そこで柿沼氏の分類案に準拠しつつ、雑駁を承知の上で以下のように分類した。

A1 折り返し口縁で縄文が施される。

a 下端に刻みが施される。1

b 刻みをもたない。2

A2 折り返し・突帯口縁で縄文が施文されない

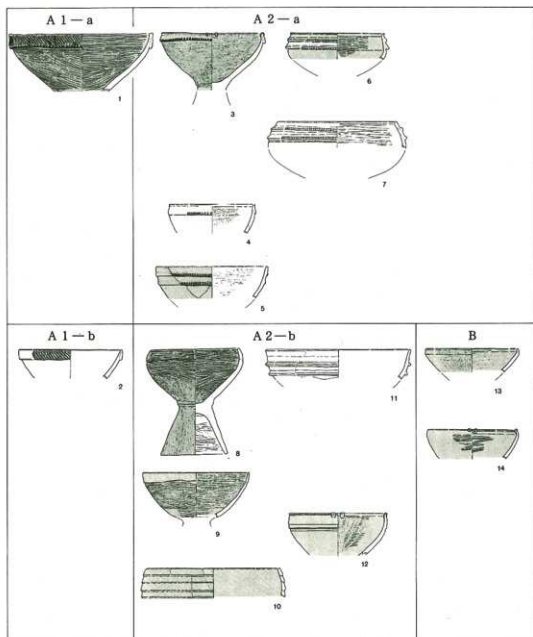
a 刻みが施される 3~7

b 刻みをもたない 8~12

B 単純口縁 13~14

A1-a類については他に貼り付け文を有するもの(3号住35)などがあるが、出土量は少ない。A2-a類は杯部が内湾さみで口唇部に刻みを有する(3、6、7)、杯部が直線的に開き、口唇部刻みなし(4、5)などの分類も可能である。またA2-b類の8、9は痕跡的な輪積痕を有するのみである。11は、粘土ヒモ貼り付けにより突帯を作出しており、20号住18、25号住2も同様の手法によると思われる。12の突帯上下は指頭により沈線状となる。B類においては口縁部が小さく内湾もしくは直立し、稜をもつものが多い。

本遺跡出土の高杯形土器の特徴としては、口縁部文様帯の如何にかかわらず貼り付け文をもつものが多いことが挙げられる。口唇部に貼り付け文をもつものとして玉太岡18号住例、白草遺跡80号住例などが挙げられるが、前者は器形、口縁部文様帯とも3と近似する。胴部に貼り付け文をもつ



第102図 大野田西遺跡出土高杯口縁部類例

例としては白草63号住例、同84号住例、大西62号住例などいずれも数段の突帯直下に付されるものが多い。A類12、B類14あるいは11号住1のごとく口縁部文様帯は新出的なのに口唇、杯部に貼り付け文を有するものがあることから、従来のように（Ⅰ・Ⅱa期に多い）メルクマールとするには再検討が必要と思われる。なお吉ヶ谷式高杯の特色とされる杯部と脚部の接合部の突帯については、観察しうる個体総数22例の内、14例に認められる。

本遺跡出土の高杯形土器の中でも1、3が最古相であることは他遺跡出土例と比較しても明白である。特に1のごとく縄文と刻みを具備する類別は、霞ヶ関遺跡例、花影遺跡例など吉ヶ谷式期においても最古相に位置付けられるものが多い。これらの編年の位置付け如何により、本遺跡の上限が決まるとも言える。

鉢形土器

高杯A1-b類と口縁部に縄文を施文した鉢、あるいは甔との識別は小片が多い故に困難である。また蟹沢遺跡グリッド出土例のように高杯A2-b類と同様、無文の折り返し状口縁を有するものもある。本遺跡の単純口縁の鉢形土器は、口縁部がやや内湾するもの(22号住11)、直線的に開くもの(3号住11)の2者に大別できる。

甔形土器

4例出土した(3号住20、13号住22、20号住54、南遺物包含層12)。いずれも底部のみで器形は不明であるが、底径4.3~5.8cm、孔径1.2~1.6cmの範囲に収まり、ある程度の規格性を認めることができる。

片口形土器

第14号住居跡から出土している。これを吉見町八耕地遺跡出土例と比較すると、口の張り出しがやや弱く、輪積痕を利用した折り返し状口縁を有するなどの相違点が見いだせるが、器形的には無頸壺のごとく胴部最大径が口径を上回り、口縁部に縄文帯を有するなどの点で一致をみる。なお管見に触れる限り、吉ヶ谷式期の片口形土器はその他に万願寺遺跡の1例のみであり、吉ヶ谷式の器種構成要素の一端を担うか否かは、さらに類別の増加を待つ必要がある。

台付甕その他

吉ヶ谷式土器の系統とは異なる台付甕は9号住、18号住、22号住などから出土している。胴部内外面をヘラミガキ調整するもの(18号住1)、端部に刻みを施すもの(22号住13)、口縁部が「く」の字に強く外傾し接合痕を明瞭に残すもの(22号住14)など多岐に渡る。その他、系統の異なる遺物として、9号住8、12、15、22および22号住12、18、19等が挙げられる。これらはいずれも覆土中からの出土であり、住居跡に帰属する確証に欠ける。

これらの遺物の時間的序列も可能ではあろうが、ここでは大枠として弥生時代後期後半~古墳時代前期として捉えておき、今後、他遺跡例を含めての検討課題としたい。

大谷、屋田遺跡など吉ヶ谷集落の立地する同一丘陵上に、引続き古墳時代前期の集落が営まれる例は多い。本遺跡においても、調査区外に後続する住居跡が存在する可能性を考慮しなくてはならないだろう。

描文土器

第2号住居跡6、第7号住居跡11、第20号住居跡88~91が挙げられるがいずれも小破片で、器形が把握できるものはない。20号住88のごとく口縁部に波状文が配され、全体的に波状文の振幅が小さく乱雑であることから弥生時代後期後半以降の可能性を指摘するに留めたい。

以上、雑駁に各器種毎に概観してきたが、本遺跡出土吉ヶ谷式土器の編年の位置を求めたい。最

古相は15号住2、および5号住4の高杯形土器が従来編年のⅡa期に遡ると思われる。ただし編年基準たる変形土器で確実にⅡa期の属性を満たすものはない。3号住1・2、8号住1にⅡa期の要素が若干認められるものの、それぞれ新出の器形、調整技法を有することからⅡb期の範疇で捉えたい。終末の段階は、22号住出土遺物(2・5・6・13)が上組Ⅱ遺跡36号住例と同一の器種構成を有している点からⅢ期に比定される。ただしⅢ期の標識資料たる根平遺跡4号住例のような頸部の外反が強い変形土器、あるいは小型器台は出土しておらず、Ⅲ期内での編年の序列は今後の重要な課題である。また18号住に帰属する吉ヶ谷式土器は、接合部に突帯を有する高杯脚部のみであり、相伴する台付甕と後述するミニチュア土器の類例からも、あるいは吉ヶ谷式期以降の可能性もある。20、22、26号住の重複をはじめとする住居跡の配列からは、3段階以上の設定がより整合性を持つと思われるが、器形の全容が把握できたものが僅少であったことと、出土状況にも起因して、遺物からは集落構成の段階設定を行えない。したがって本遺跡の編年の位置付けは、おおまかに吉ヶ谷Ⅱ～Ⅲ期および18号住の継続と見たい。

他の遺跡例を概観すると、例えば変形土器のもつ属性からⅡ期とされる江南台地の集落(白草、焼谷、万願寺)出土の壺形土器B類の主体は、刻みのないB1類(本来Ⅲ期に盛行するとされる)であるように従来の編年観との矛盾が生じている。該期の資料増加が著しい現在、一括資料を中心に据えた再検討が必要と思われる。

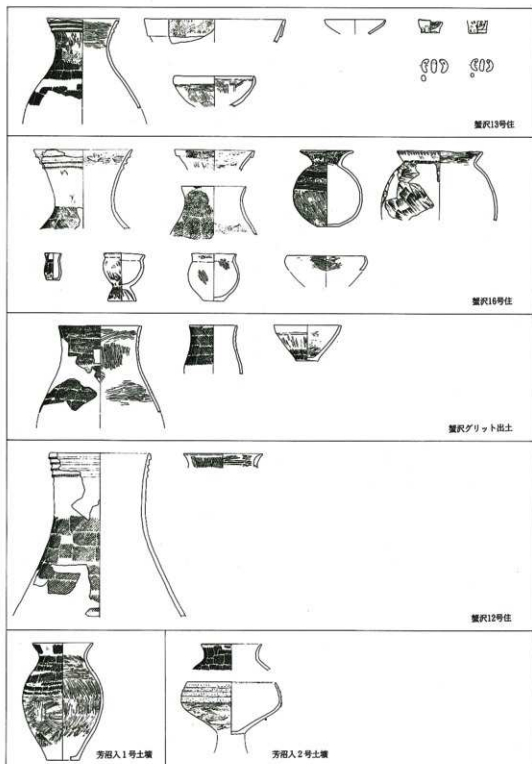
次に事業地内蟹沢・芳沼入遺跡の吉ヶ谷式土器(第103図)について概観してみたい。蟹沢遺跡出土の変形土器については胴部にハケメ調整が残るものではなく、輪積痕が整然と残るものも少ない。また縄文施文は概して雑な傾向がある。しかし変形土器をみる限り、前述したように本来Ⅱb期に盛行するとされるB2類が主体を占め、また数例出土しているA類の小片には刻みが施されないなど、本遺跡のそれと傾向は近似する。ただし高杯形土器については、A2-b類とB類のみの構成であり、縄文を施文するA1類、刻みを有するA2-a類は出土していない。

数例出土している台付甕を本遺跡例と比較すると、器形、整形技法の上で同時期あるいはやや新しいものが含まれている。また東海系の壺形土器が出土している点が注目される。なお蟹沢遺跡は集落が完掘されており、出土状況からも、これらの遺物は住居跡に帰属すると思われる。

祭祀関連遺物としては土製勾玉、ミニチュア土器などが出土しており、本遺跡と組成は近似するが、ハケメ調整を残す台付甕のミニチュアが出土していることから、より新出の可能性もある。

芳沼入遺跡の土壇出土の変形土器は、頸部が「く」の字に強く外反し縄文施文も雑である。高杯形土器は痕跡的な輪積痕を残し、杯部に貼り付け文を持つ。吉ヶ谷Ⅲ期の根平、龍田遺跡例と近似する土器組成といえる。また類似する高杯形土器は本遺跡からも出土(22号住8)しているが、芳沼入遺跡例は指頭圧痕を明瞭に残すことから、より新出の可能性もある。

これらをふまえて本遺跡との時間的関係を推察するならば、蟹沢遺跡は本遺跡の新相の土器組成をもつ22号住と同時期、もしくはやや後出の土器群を有すると言える。住居跡形態も方形(第108図右上)が主体を占めており矛盾はしない。また芳沼入遺跡の2基の土壇は両集落にさらに後続する可能性がある。



第103図 蟹沢・芳沼入遺跡出土遺物

祭祀関連遺物（第104図）

本遺跡出土の祭祀関連遺物はミニチュア土器、土製勾玉、土玉、石製模造品が挙げられる。

ミニチュアA類

推定口径5.6cmで口唇部にも縄文が施文され、吉ヶ谷式甕を忠実に模倣している。口径6cm前後の類例としては蟹沢、屋田、四反歩、駒掘遺跡例が挙げられる。

ミニチュアB類

18号住一括出土のもので、Ⅲ章で述べたように3器種に分類できる。また調整技法が異なる9号住25はB'とした。弥生時代後期～古墳時代前期においてこれらの類例は非常に多い。その中でも器形、整形上酷似するものとして、近隣においては嵐山町屋田遺跡3号住例、坂戸市中耕遺跡62・63・64号住例が挙げられるが、両者とも古墳時代前期初頭の遺物と相伴している。

ミニチュアC類

小型の鉢形土器の範疇にも入るが、口径は1=6.4、2=6.3、3=8.8cmと小型であり、器壁も非常に薄い。また器面に指頭押圧痕が明瞭に残りヘラミガキ調整されない。

ミニチュアD類

通常手捏土器と呼ばれるミニチュアD類は、口径、器高ともB、C類に較べ著しく小型である。粘土ヒモ巻上げ成型のもの（D7、8）、ヘラミガキ調整をおこなうもの（D1、6）、赤彩されるもの（D7）などの区分も可能である。D5、6の高杯形土器のミニチュアは玉太岡遺跡から2例出土している。

土製勾玉

吉ヶ谷集落出土例として蟹沢、船川、焼谷、大西、玉太岡、吉ヶ谷遺跡例が挙げられるがいずれも1～2個体の出土であり、出土量は群を抜いている。また出土状況をみると19号住例はいずれも壁際覆土上層から出土しており、住居跡廃絶後の遺棄の可能性がある。

石製模造品（鏡）

県内において類例は少なく、岡部町須黒神社遺跡の35号住例（和泉式期）、石薪A遺跡の溝中出土例（五領～和泉式期）を数えるのみである。本遺跡例は第13号住居跡の覆土上層より出土しているため、確実に埴輪時期は不明である。現段階では集落が継続する弥生時代後期～古墳時代前期の所産と考えたい。なお材質は本遺跡周辺の基盤層の凝灰岩と同一であることから、在地製と思われる。次に出土状況を見ると、18号住のミニチュアB類の一括出土が目を引くが、20、22号住のミニチュアD類（計8点）および土製勾玉（計5点）の出土量も注目される。両住居跡の埋め戻しの可能性についてはⅢ章で述べてきたが、ここでは19号住の土製勾玉同様、住居跡廃絶に伴うなんらかの祭祀形態の可能性を指摘したい。日常雑器たる甕・壺類と比較して完形率が高いのは小型ゆえの偶然であろうか。ミニチュアD、土製勾玉の一括出土例は玉太岡遺跡4号住、蟹沢遺跡13号住（貯蔵穴内出土）などがあり吉ヶ谷式期を通しての祭祀の存在を推定できる。ただし弥生時代後期～古墳時代にかけてのミニチュア土器を筆頭とする祭祀関連遺物から、具体的な祭祀諸形態を抽出することは困難である。丘陵上に立地する吉ヶ谷集落の祭祀特性を抽出するには、他地域の例を含め、今後の検討が必要である。

石器

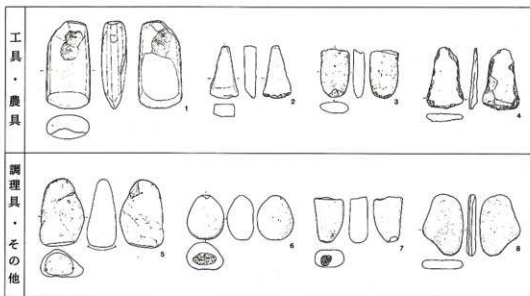
本遺跡の特徴の1つとして、住居跡から多くの石器が出土した点が挙げられる。吉ヶ谷式期という視点のみならず、弥生時代後期という時代相からしても、注目に値する石器組成を示していると思われる。以下器種ごとに若干の説明を行いたい。なお第105、106図の石器の2大別は中村氏の分類（吉田他1991）に準拠し、広義の石斧の範疇のものを工具・農具とし、その他の磨石、敲き石、砥石などを調理具・その他とした。

石斧

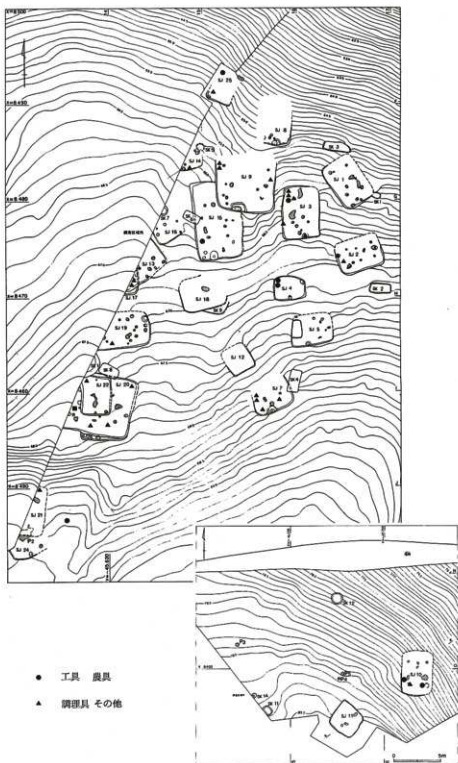
第15号住居跡から太型蛤刃石斧が1点出土している（第105図1）。吉ヶ谷集落出土のものとしては滑川町船川遺跡2号住例に限られるが、共伴する遺物は古墳時代前期のものである。その他県内における後期以降の類例は、管見に触れる限り浦和市馬場北遺跡例のみである。前章で述べたように、本遺跡出土品は刃部に再研磨が施され、しかも基部の短さからすると再調整を繰り返したと思われる。さらには本来の機能を失った後に敲き石に転用されており、長期の使用が想定できる。

また10号住出土の石斧（第105図3）は柱穴覆土下層から出土し、さらには同じ柱穴底面（凝灰岩）に工具痕が残っていたという2つの状況証拠から、土堀り具としての機能を推定できる。また南遺物包含層からは片刃柱状石斧と思われる石器が出土している。刃こぼれと思われる規則的な剝離痕は刃部の反対側、平坦面に認められる。

石鍬とも称される打製石斧は、住居跡から4点、包含層その他から2点出土している。いずれも欠損部位が多く形態が不明なものが多いが、おそらく楕形（4号住9）、および短冊形となると思われる、明確に側縁部に挟り込みをもつ銅形は認められない。また10号住例同様に柱穴覆土から打製石斧（3号住42）が出土している。なお4号住出土の2点（4号住8・9）は刃部、基部ともかなり摩耗していた。



第105図 石器類型



第106図 石器出土地点

磨石

扁平なもの(第105図8)が計11点、棒形のもの(同5)が計5点出土している。扁平磨石の石材は砂岩と閃緑岩が主体を占める。ほとんどのものがほぼ全面摩耗しており平滑である。また端部が摩耗しているもの(10号住13)もある。3号住39、20号住92に赤褐色の付着物が認められた。類例として小敷田遺跡出土の太型蛤刃石斧に赤色物の付着物が報告されている。あるいは本遺跡例は、次に述べる棒形磨石とセットとなるのであろうか。ただし扁平磨石と棒形磨石の共存する住居跡はなかった。

棒形磨石は計5点がいずれも住居跡から出土した。棒状の礫の先端を作業面とする。非常に平滑で光沢を持つに至るが、作業面が凸状で、やや使用頻度が低かったと思われるもの(14号住8)もある。いずれも握りはすこぶる良好である。類例を求めると、県内では小敷田遺跡河川跡例、明花向A区1号住例、鶴ヶ丘F区11号住例など弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺構から出土している。他県においては八王子市神谷原遺跡から計15点が出土しており、石杵として報告されている(八王子市栢田遺跡調査会1981)。その詳細な分析から、敲打の機能を併せ持った石器とされ、石臼(石皿)とセットで赤色顔料調整用具と用途を推定している。本遺跡例のなかにも端部に敲打痕のあるもの(9号住41)が存在する。なお石皿は、7号住から欠損品が1点出土している。

敲き石

大別すると球形(105図6)のものが計2点、棒形(同7)が計4点出土しているが、大きさ、形態とも様々である。球形のものは長い端部を作業面とする。棒形の場合は先端部を作業面とするが、大型(7号住15、20号住95)のものと小型(13号住53)のものに分類できる。

砥石

手持用と思われる小型のもの(20号住94)、設置用と思われる大型のもの(2号住8)など多岐に渡る。また遺構に伴わず縄文時代に帰属する可能性もあるが、有溝砥石も1点出土している(第84図15)。

このような多彩な石器を保有するにもかかわらず、磨製、打製の石庖丁、該期の石鎌が1点も出土していない点が弥生時代中期の石器組成との相違点といえる。ただし南遺物包含層よりチャート製の石核が出土していることから、中期同様に打製石斧とセットをなす(麻生1990)剥片石器が存在した可能性もある。ただし砥石の中には10号住12のごとく鉄器を対象とした可能性がある方柱状砥石が出土しており、鉄製品の存在を予想させる。

本遺跡の石器組成をあえてまとめるならば、縄文時代から系譜が辿れる打製石斧、磨石、敲き石等を主体として保有しながらも、本来宮ノ台式期に盛行する大陸系磨製石斧を引き続き使用する。さらには該期特有といえる棒形磨石(石杵)を保有するなど、かなり複雑な様相が伺える。弥生時代後期という時代相からして鉄器の普及については疑問の余地はないが、各種石器の出土は、作業用途による利器の選択の結果を反映していると思われる。

他の吉ヶ谷集落出土の石器としては四反歩、白草遺跡、円阿弥遺跡等から出土した石皿、砥石、磨石等が挙げられるが、個体数としては僅少と言わざるを得ない。本遺跡の石器組成が、特殊なものなのか、あるいは普遍的なものなのか、今後の類例の増加を待って検討する必要がある。

住居跡

本遺跡の住居跡は斜面に立地していることから流出の影響が大きく、さらには調査区際に分布が偏ることも手伝って完掘できたものも限られる。また出土遺物から集落の段階設定を明確に行えなかったことから、段階毎の住居跡形態・構造の変遷を述べることができないが、比較的遺存状況が良好であった住居跡を概観して問題点を抽出することを目的としたい。

主軸方向（第107図）

第1住居跡群を概観すると、主軸が南北方向のものと東西方向のものに大別できるが、明確な基準は見いだせない。ただし対等高線の観点からすると、急斜面においては南北方向、緩斜面においては東西方向というおおまかな設定が認められる。この観点からすれば、第2住居跡群の10号住、第3住居跡群の6号住も同様の傾向と言える。つまり岩盤の露出する立地の側面に左右される住居配列とともに、斜面地という側面に多分に規制された住居跡の主軸設定と言える。

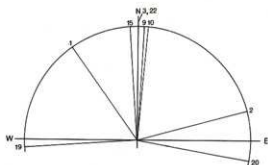
また仮に貯蔵穴側（主軸に配置される炉の反対側）に入口関連施設があると想定すると、第1住居跡群の各住居跡の入口は斜面上方にあたる南側、もしくは18号住付近の遺構分布の希薄域側に構築される例（2、17、19号住）が大半を占める。集落の全容が判明しない状況で、18号住周辺を広場空間と規定することはできないが、ミニチュア土器を一括出土した18号住を集落終末段階とすると、やはり前段階まで最も平坦な地域に空間を有していたことになる。

規模・形態（第108図）

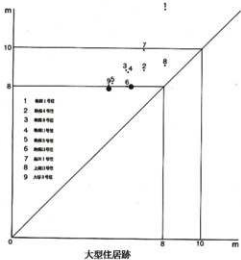
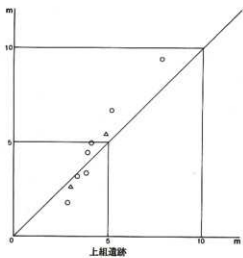
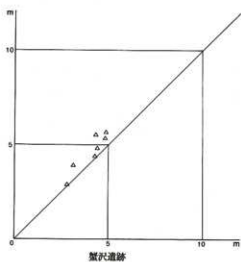
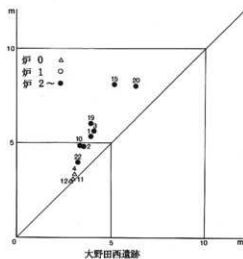
住居跡の規模が確定できたもの、主柱穴の配列から推定できたものは25軒中、11軒のみである。ここで注目されるのは長軸8mを越える15、20号住居跡である。また正確な規模・形態が不明な9号住居跡も、2辺とも6mを越え、床面積からすると他の住居跡と峻別できる規模を有しており、この3軒をもって大型住居跡としたい。

弥生時代的大型住居跡については、主に南関東地方を中心に分析した小久保氏の論考（小久保1977）がある。①「最大規模をもち、他の住居跡とは絶対的規模を大にして出現していること」、②「他の住居群とは一定距離を隔てて、単独存在であること」、③「平面形態、構造、施設が定形化した住居形態をとること」を基本的特徴としている。各段階の住居跡構成が判然としない現状では②が不明と言わざるを得ないが、仮に3軒に時間差があるとすれば、15、20号住居跡は①③が該当する。他と隔絶する大型住居跡の出現は、すなわち集落内での階層差と捉えられるが、隅円長方形→隅円方形という該期住居跡形態の推移と照らし合わせると15→20→9号住という大型住居跡の集落内での推移が看取される。ただし前項で述べてきたように20号住に帰属する出土遺物が確定できない状況からは20号住と15号住との先後関係はさらに検討を必要とする。それに対して4、12および11号住居跡は規模・構造の上で他と分類できる。この3軒はいずれも確実な炉を持たず、柱穴の有無および配列、床面の様相も三者三様である。あるいは竪穴状遺構の範疇で捉えるべきかもしれないが、それぞれの形態、規模、構造から住居跡として取り扱いたい。

住居跡規模のばらつきが顕著な吉ヶ谷集落としては、上組遺跡が挙げられる（第108図左下）が小型住居跡は炉を有するもの、4本主柱を有するものなど類型化は難しい。また集落内において中型の住居跡を取り囲む様な配置を示し、本遺跡の4、12号住居跡の配置と逆の様相を示すと言える。



第107図 住居跡主軸方向



第108図 住居跡の規模

形態については隅円長方形と隅円方形に2大別されようが、長短軸長の差により以下のように分類できる。(数値は長軸/短軸)

- A 1.03、1.06 (11、12号住)
- B 1.24~1.31 (4、20、22号住)
- C 1.38~1.44 (1、2、3、10号住)
- D 1.54、1.57 (15、19号住)

A群は隅円方形と捉えられるが、前述したように小型住居跡である。B群については重複する20、22号住が同様の数値であり、規模の上では圧倒的な格差を有するものの方角化への移行は示していないと言える。C群とした4軒はかなり近似した数値と形態を示し、一定の規格性を看取できる。ただし1~3号住は極く近接しており同時期の上屋架橋は想定できない。

貯蔵穴

吉ヶ谷集落における貯蔵形態については、I・II期の屋外土壌からIII期の屋内土壌への推移が、共同体内における食料管理の強化という視点から論じられている(井上1983)。吉ヶ谷集落の調査例が増加した現在でも、例えば江南台地に立地するII期とされる白草、四反歩、焼谷遺跡等において、帰属する住居跡が推定できる土壌(竪穴状遺構)が多数検出されており、その推移は首肯できる。

本遺跡住居跡の貯蔵施設を概観すると、以下の形態に分類できる。なお調査区外に貯蔵穴が存在する可能性をもつ住居跡についてはここでは当然除外する。

- A(1) 屋外土壌(1、2号土壌その他)
- A(2) 明確な貯蔵穴をもたない。(1、2号住)
- B 周堤帯を伴わない貯蔵穴を有する。(15、19、22、24、25、26号住)
- C 周堤帯を伴う貯蔵穴を有する。(3、7、8、9、17号住)
- D 住居内土壌を有する。(5号住)

A(1)形態に関して本遺跡例は、いずれも遺物を出土しておらず判然としない。あるいは他の遺跡同様に、最も近接する住居跡に帰属するのであれば、1号住-1号土壌、2号住-2号土壌の関係となろうか。なお蟹沢遺跡においては、住居跡と極めて密接する該期の円形土壌が検出されている。A(2)形態については貯蔵穴の可能性のあるピットを壁際に保有する住居跡もあるが、B、C形態としたものと比較すると規模の上で明らかに差がある。B、Cの住居跡内での配置は、主軸からやや左右に外れるものが主体をしめるが、コーナー部に構築されるもの(22、25号住)もある。なお方台状の周堤帯を有する9号住は、C形態中でも一線を画すと言える。D形態とした5号住は壁際に貯蔵穴の可能性のあるピット(P5)を保有しながら、住居内土壌を併せ持つ特異な例である。

これらを先の貯蔵形態の推移と照らし合わせると、A→B→Cの変遷となろうが、先に述べた出土土器、住居形態の推移と合致しない。蟹沢遺跡においてはC形態は存在せずB形態の貯蔵穴も11軒中1軒に認められるに過ぎない。滑川対岸に立地する船川遺跡(吉ヶ谷I期)においてはA(2)、C形態の住居跡があり、一律に変遷過程を論じることはできない。

炉

吉ヶ谷式期の住居跡の特徴として複数の炉を有することはすでに論じられているところだが、本

遺跡においても例外でなく、中型以上の住居跡の大半は、複数の炉を有していた。その配置は複雑で、ほぼ完掘できた住居跡のみをとってみても、主軸にのる炉（以下主炉）が奥壁側の柱穴を結ぶラインにほぼ載るもの（15号住、20号住）、ラインの外側（2号住、3号住）、内側（10号住）など多様である。さらには主炉以外の炉の配置も、柱穴を結ぶラインにほぼ載るものや、内区に配置されるものなどがあり、その間に規則性や統一性は認められない。

なお調査の段階では床面の被熱痕との誤認を恐れて、すべて断ち割りを実施したが、いずれも継続的な使用を想定するに十分な焼土堆積と思われた。19号住の重複する炉に関しても継続使用の結果と考えられる。また長軸8mを越える大型住居跡である15号住居跡で5基、同じく20号住居跡が5基の炉を有しており、他の住居跡の保有数と比較すると明らかに格差を有する。これを一夫多妻制（前掲井上）に起因する集住的な居住様式ととるか、あるいは屋内祭祀等の結果とみるかは、今後、生活段階で焼失した住居跡などの良好な資料の増加を待って再検討する必要がある。

おわりに

以上、本遺跡の特性、問題点を羅列してきたが、どの項目においても雑駁この上なく、遺跡、遺物に正当な評価を与えられなかった責任を痛感する。特に重複する住居跡という編年作業に有効な資料を全く生かせなかったのは、筆者の怠慢以外のなにものでもない。今後、機会を改めて、集落の段階設定をはじめ吉ヶ谷III期の編年の位置、出土石器、住居跡構造の問題等の検討課題に取り組みたい。

II章 1・2 引用・参考文献

- 堀口 万吉 1986 「埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史別編3 自然』埼玉県
嵐山町 1983 「嵐山町史」
滑川村 1984 「滑川村史」
新井 端 1983 「姥ヶ沢遺跡Ⅰ」 江南町教育委員会
植木 弘 1980 「金平遺跡」 嵐山町教育委員会
植木 弘 1988 「行司免遺跡」 嵐山町教育委員会
新井 端 1982 「塩前遺跡」 江南町教育委員会
金井塚良一 1976 「花見堂」 嵐山町教育委員会

II章 3 およびIV章 引用・参考文献

- 麻生 敏隆 1990 「弥生時代の石製農具—石鎌と石庖丁」『研究紀要』第7号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
石岡 憲雄 1982 「『吉ヶ谷式』と『岩鼻式』土器について」『研究紀要』第4号 埼玉県立歴史資料館

- 井上 尚明 1983 「関東における後期弥生集落の模様」『研究紀要』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎 一 1988 『新田裏・明戸東・原遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎 一 1992 『白草遺跡Ⅱ』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大塚 実 1986 「吉ヶ谷および岩鼻式土器の背景」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 柿沼 幹夫 1981 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 柿沼幹夫他 1989 「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第25号 埼玉考古学会
- 柿沼 幹夫 1987 「埼玉県北西部地方の櫛櫛文土器」『埼玉考古』第23号 埼玉考古学会
- 金井塚良一 1965 「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』16
- 金井塚良一 1973 「大谷遺跡」滑川村教育委員会
- 金井塚良一 1976 「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』16
- 金井塚良一・高柳茂 1987 「船川遺跡」船川遺跡調査会
- 金子 直行 1993 「四反歩」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立平 進 1983 「弥生時代、片刃石器の実態」麻生優編『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集』
- 木村 俊彦 1986 「滑川村新井・追越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 栗原文蔵・谷井彪他 1974 「駒掘」埼玉県教育委員会
- 黒坂 楨二 1989 「上組Ⅱ」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 恋河内昭彦 1992 「児玉地方における弥生時代の概観」「児玉地方における埋蔵文化財の成果と概要」
- 北日本古代文化研究会編 1993 「古墳時代の祭祀」第2回東日本埋蔵文化財研究会
- 小久保徹他 1976 「鶴ヶ丘」埼玉県教育委員会
- 小久保 徹 1977 「弥生時代の大形住居跡について」『埼玉考古』第17号 埼玉考古学会
- 鈴木 孝之 1991 「代正寺・大西」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 杉崎 茂樹 1993 「中耕」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高崎 光司 1990 「玉太岡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦他 1991 「竹之花・下大塚・円阿弥」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中島 宏 1984 「池上・池守」埼玉県立さきたま資料館
- 橋口 尚武 1987 「畑作の承継—弥生時代の入間・多摩地区の石器を中心として」柳田敏司先生還暦記念論集刊行委員会編『埼玉の考古学』新人物往来社
- 八王子市棚田遺跡調査会 1981 「神谷原Ⅰ」八王子市資料刊行会
- 平野 進一 1992 「大陸系磨製石器類の終焉と鉄製品の普及—関東地方・中部山岳地方—」第31回埋蔵文化財研究集会『弥生時代の石器—その始まりと終わり』第6分冊
- 水村孝行他 1980 「根平」埼玉県遺跡発掘調査報告書27集 埼玉県教育委員会
- 村田健二他 1982 「龍田・鶴田」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村松 篤 1991 「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町教育委員会
- 吉田 稔他 1991 「小敷田遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

付編 大野田西遺跡出土土器胎土分析

1. X線回析試験及び電子顕微鏡観察

縄第四紀 地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}$ の試料台にシルバークレーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40Kv, Current : 30mA, ステップ角度 : 0.02° , 計数時間 : 0.5SEC.

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の割合についての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真撮影をした。35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

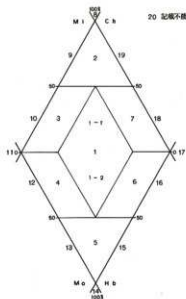
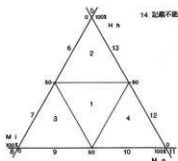
2 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。



第109図 ダイアグラム位置分類図

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第109図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mo} / (\text{Mo} + \text{Mi} + \text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第109図に示すとおりである。

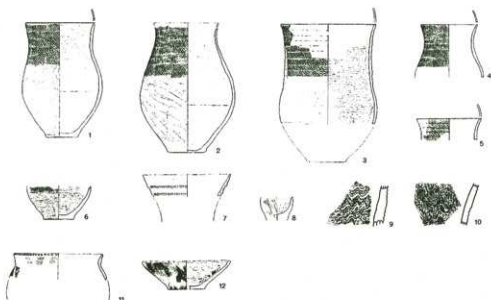
2) Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

第109図に示すように菱形ダイアグラムを1～9に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, chの2成分が含まれない、c) Mi, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

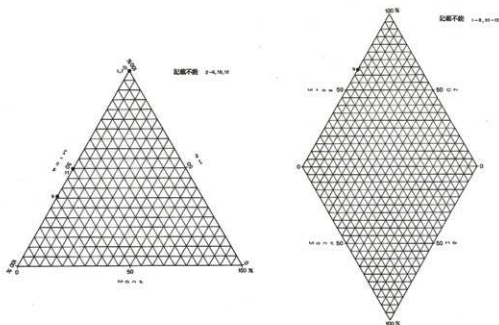
Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mo} / (\text{Mo} + \text{Ch}) \times 100$ と計算し、Mi, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。



第110図 実験対象土器

試料 No	タイプ 分類	形状 ラング	組成分析			微量元素および示別物														備考
			Mo-Sb-Fe	Mo-Cu-Mo-Sb	Mo	Mn	Co	Cr	Fe	Ca	Na	Al	Si	Cl	Br	I	As	S		
大野田器-1	D	器	3	20					96					4829	308	149			赤土質式器	
大野田器-2	J	器	13	20					184					2361	441	115			赤土質式器	
大野田器-3	J	器	15	20					200					2403	630				赤土質式器	
大野田器-4	I	器	14	20					2478	567				2347	539				赤土質式器	
大野田器-5	I	器	14	20					200					3396	131				赤土質式器	
大野田器-6	J	器	15	20					2849	667									赤土質式器	
大野田器-7	D	器	3	20					63					5678	348				ニニヤア土器	
大野田器-8	H	器	7	9		149	82	181						4749	799	183		322	引器式輪胎支	
大野田器-9	E	器	7	9					796	678	151								引器式輪胎支	
大野田器-10	I	器	14	20					73	22				3378	612	170			引器式輪胎支	
大野田器-11	F	器	7	20					203					4605	352				引器式輪胎支	
大野田器-12	J	器	13	20															引器式輪胎支	
代正寺-1	B	器	1	13	210	179	277							2026	954				引器式輪胎支	
代正寺-2	A	器	1	1	234	124	134							1816	405				引器式輪胎支	
代正寺-3	G	器-器	8	20										3969	416				引器式輪胎支	
代正寺-4	B	器	1	15	341	145	367							3528	476				引器式輪胎支	
代正寺-5	D	器-器	5	20										3184	408				引器式輪胎支	
代正寺-6	G	器	8	30										3912	538	105			引器式輪胎支	
大野-7	D	器	5	20										3889	459				赤土質式器	
大野-8	I	器-器	14	20										6432	328	143		180	赤土質式器	
大野-9	I	器-器	14	20										3553	1004				赤土質式器	
大野-10	G	器	8	30										4468	160	164		190	赤土質式器	
大野-11	E	器	7	9										4223	469				赤土質式器	
大野-12	D	器	5	20										3220	877				赤土質式器	
大野-13	D	器	5	20										4632	631				赤土質式器	
大野-14	I	器	14	20										2420	648				赤土質式器	
大野-15	I	器	14	20										4923	236				赤土質式器	
大野-16	I	器	14	20										5381	352				赤土質式器	
大野-17	I	器	14	20										934	371	194			赤土質式器	
大野-18	I	器	14	20										3645	425	196			赤土質式器	
大野-19	I	器	14	20										3079	289				赤土質式器	
大野-20	I	器	14	20										2022	246				赤土質式器	
大野-21	D	器	5	20										3397	543				赤土質式器	
代正寺-22	I	器	14	20										3539	246				赤土質式器	
代正寺-23	I	器	14	20															赤土質式器	
代正寺-24	C	器-器	1	16	180	128	115							3019	363				赤土質式器	

第1表 胎土性状表



第111図 三角・菱形ダイアグラム

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第110図に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

- c) 焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残してる。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆んどできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3 分析結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、大野田西遺跡の土器と既に分析が行われた代正寺、大西、玉大岡の各遺跡より出土した土器とが記載されている。分析結果に基づいて、第111図三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムを作成し、位置分類に基づいてタイプ分類した。土器胎土は四遺跡を通してタイプ分類したもので、その結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

電子顕微鏡によるガラスの分類では、殆んどの土器が中粒のガラスを生成するに留まり、焼成ランクはⅢのものが殆んどである。

Aタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分を含む。個体数は1個と少ない。

Bタイプ：Mont、Mica、Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は2個と少ない。

Cタイプ：Mont、Mica、Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は1個と少ない。組成的にはBタイプと類似するが、強度が異なるために、位置分類が異なる。

Dタイプ：Hb1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。個体数は7個と多い。大野田西、代正寺、大西、玉大岡の各遺跡で検出されるタイプ。

Eタイプ：Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。個体数は2個と少ない。

Fタイプ：Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。個体数は1個と少ない。

Gタイプ：Mica1成分を含み、Mont、Hb、Chの3成分に欠ける。個体数は3個と少ない。

Hタイプ：Mont1成分を含み、Mica、Hb、Chの3成分に欠ける。個体数は1個で、ミニチュア土器である。

Iタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。主に、 $n\text{Al}^{2+}\text{O}^{2-} \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ （アルミナゲル）で構成される。個体数は13個と最も多い。

Jタイプ：Ch1成分を含み、Mont、Mica、Hbの3成分に欠ける。個体数は4個で大野田西遺跡だけで検出される。

以上の結果から明らかな様に、Iタイプが最も多く、次いでDタイプ、Jタイプとなり、これら3タイプで、全体の約70%を占めている。タイプ分類では胎土はどの遺跡がどのタイプと特定されるものではなく、むしろ、4遺跡が共存しているように見受けられ、関連性が伺われる。

3-2 石英(Q t)-斜長石(P l)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂はおおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

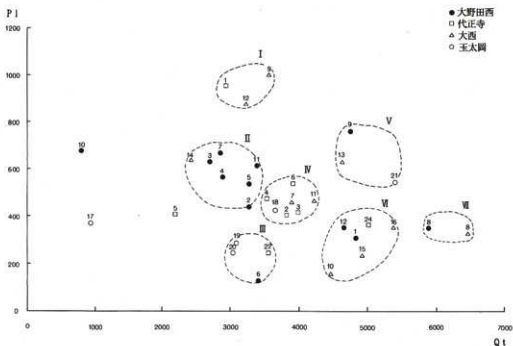
第112図Q t-P l 相関図に示すように、土器はⅠ～Ⅶの7グループと“その他”に分類された。

Ⅰグループ：代正寺-1、大西-9、12

斜長石の強度が高く異質なグループ。個体数は3個で、吉ヶ谷式の壺と高杯、岩鼻式の壺が共存する。

Ⅱグループ：大野田西-2、3、5、7、11、大西-14

吉ヶ谷式甕が集中するグループで、大西-14も吉ヶ谷式の甕で、共通性がある。胎土のタイプとしてはⅠとⅡの2タイプで構成される。



第112図 Q t-P l 相関図

IIIグループ：大野田西-6、代正寺-22、玉大岡-19、20

個体数は4個で、吉ヶ谷式甕、高杯、広口壺で構成される。胎土はIタイプが主体となる。

IVグループ：代正寺-2、3、4、6、7、大西-7、11、玉大岡-18

代正寺の岩鼻式壺が主体となるグループで、大西と玉大岡の吉ヶ谷式高杯と大西の吉ヶ谷式壺が共存する。

Vグループ：大野田西-9、大西-13、玉大岡-21

大西と玉大岡の吉ヶ谷式甕と櫛描文が共存する。

VIグループ：大野田西-1、12、代正寺-24、大西-15、16

吉ヶ谷式甕が4個集中し、大野田西-12の壺と共存する。

VIIグループ：大野田西-8、大西-8

大野田西-8はミニチュア土器、大西-8は吉ヶ谷式甕。

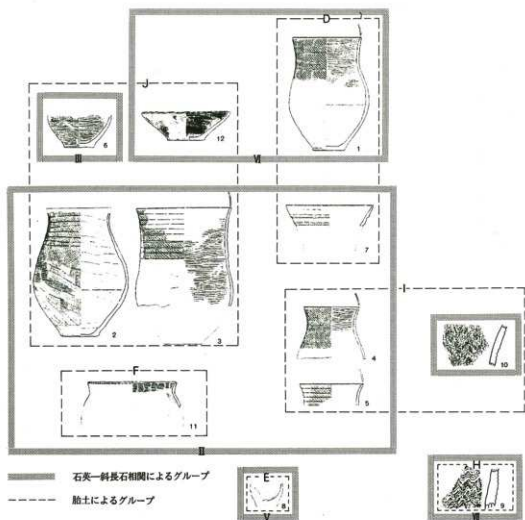
“その他”：大野田西-10、代正寺-5、玉大岡-17

大野田西-10は櫛描文の土器で石英の強度が低く異質、玉大岡-17は石英と斜長石の強度が低い吉ヶ谷式甕で異質、代正寺-5は岩鼻式壺で石英の強度が幾分低く異質であった。

以上の結果から明らかな様に、IIグループは大野田西遺跡の吉ヶ谷式土器が集中するグループ、IVグループは代正寺遺跡の岩鼻式壺が集中するグループ、VIグループは吉ヶ谷式甕が集中するグループとして特長付けられる。他のグループは大野田西、代正寺、大西、玉大岡の各遺跡の土器が共存するもので、各遺跡の関連性が伺われる。大野田西-8はミニチュア土器で、石英の強度が高く異質である。

4 まとめ

- 1) 土器胎土はA～Jの10タイプに分類された。最も多いタイプはIタイプで13個、次いで、Dタイプの7個、Jタイプの4個となり、これら3タイプで全体の約70%を占める。この3タイプのうちJタイプは大野田西遺跡だけで検出されるもので、大野田西遺跡の固有の胎土と推察される。IとDの2タイプは4遺跡の土器で検出され、各遺跡の関連性を物語っている。
- 2) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは殆んどが中粒のものであり、焼成ランクはIIIと余り高くない。
- 3) 石英と斜長石の相関では、土器はI～VIIの7グループと“その他”に分類された。IIグループは大野田西遺跡の吉ヶ谷式甕が集中するグループ、IVグループは代正寺遺跡の岩鼻式壺、VIグループは吉ヶ谷式甕が集中するグループとして特長付けられた。他のグループは各遺跡の土器が共存し、遺跡間の関連性が伺われた。また、大野田西-8のミニチュア土器は石英の強度が高く異質であった。



第113図 実験結果による土器分類

2. 成果と課題

土器分類と胎土分析について

本遺跡出土土器の中で12点の胎土分析を委託したが、数の制限もあり、主に器形が把握できる吉ヶ谷式甕形土器5点を中心に、吉ヶ谷式壺形土器2点、ミニチュア土器1点、さらには吉ヶ谷式土器と承譜を異にする櫛形文系土器の小片2点、同じく承譜を異にする口縁部に刻みのある台付甕とハケメ調整が明瞭に残る甕形土器（擬口縁をもつ）を選択した。4、11、12は同一住居跡出土のものである。またミニチュア土器は第18号住居跡一括出土の1点で、成形法、肉眼観察による胎土、焼成度合などはすべて酷似していることからそれらの代表と考えた。

また井上氏の御厚意により平成3年度に胎土分析をおこなった東松山市代正寺・大西遺跡、大里村玉太岡遺跡の吉ヶ谷式土器と岩鼻式土器のデータも参考資料として合わせて提示して頂いた。

以上の土器の分析の結果は前項までに詳しいが、「胎土分析」と「石英—斜長石の相関分析」による集合関係を同時に表すと第113図のようになる。両分析の分類を同時に満たす集合は、①2と3の吉ヶ谷式甕形土器、②4と5の吉ヶ谷式甕形土器、③8のミニチュア土器、④9の櫛形文系土器の4つとなる。また他の遺跡の資料の中で上記の集合を満たすものとして②に大西遺跡の吉ヶ谷式甕形土器のみが該当する。

2つの自然科学的分析結果を土器分類の視点に立つと、本遺跡の在地の土器たる吉ヶ谷式土器（1～7）は全体集合としてはまとまる傾向が認められる。また本遺跡資料だけで構成されるJタイプ中に、吉ヶ谷期終末段階の器種構成に加わると思われる11、12の甕形土器が含まれることも判明した。それに対し、8のミニチュア土器、9の櫛形文系土器がそれぞれ単独となるのは興味深い。ただし他の遺跡資料を含めて検討すると、8は「石英—斜長石分析」によると大西遺跡の吉ヶ谷式甕形土器と同じグループに属し、9は大西、玉太岡遺跡の吉ヶ谷式甕形土器と同じグループとなるなど様相は複雑である。特に弥生時代終末～古墳時代初頭に多く見られる、在地の土器を模倣しないミニチュア土器の分析の類例を待ちたい。

このような自然科学的分析を考古学的な分析に結びつけるには、より多くの資料を、時代相、地域相の解明などの明確な目的意識のもとに計画的に実施する必要がある。また在地土器の根拠となるべき遺跡周辺の粘土を採集・分析しなかったことをおわびしたい。

写 真 图 版

図版 1



大野田西遺跡 航空写真

図版 2



遺跡遠景（南東から）



遺跡全景（北から）



遺跡遠景（長沼谷から）

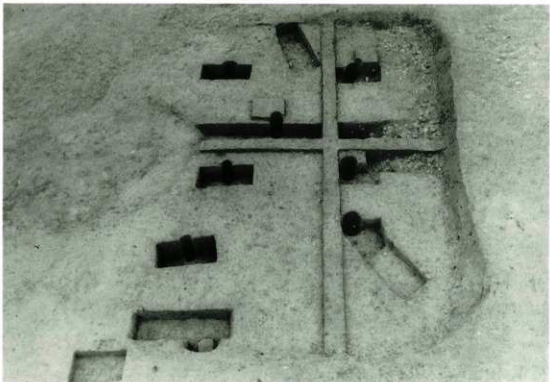


調査前の大野田西遺跡

图版 4



第1号住居跡炭化材出土状況



第2号住居跡

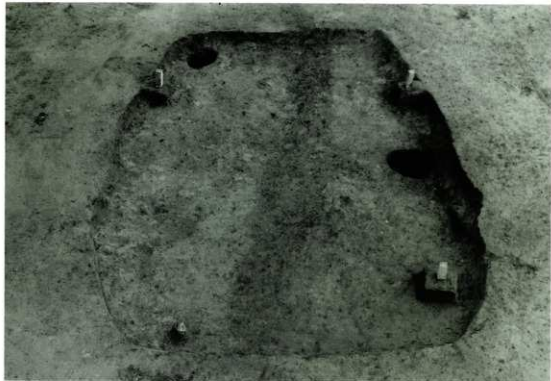


第3号住居跡

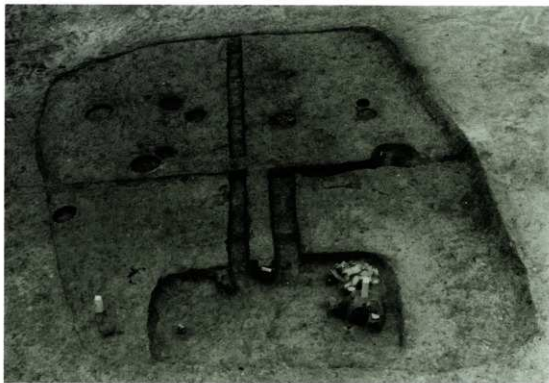


第1・2・3号住居跡

图版 6



第4号住居跡



第5号住居跡



第5号住居内土壊遺物出土状況



第7号住居跡

图版 8



第8号住居跡



第9号住居跡

图版 9



第12号住居跡



第14号住居跡

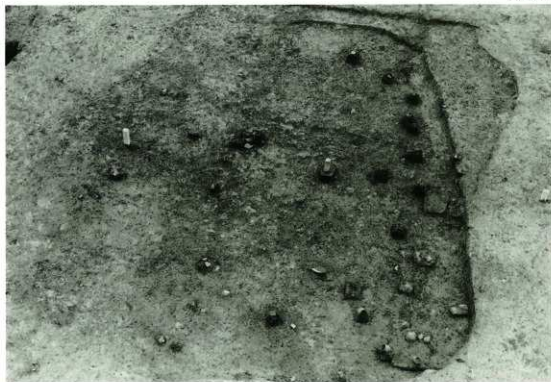
图版10



第13·17号住居跡



第15号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況 (1)



第18号住居跡遺物出土状況 (2)

图版12



第19号住居跡



第20・22号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡遺物出土状況



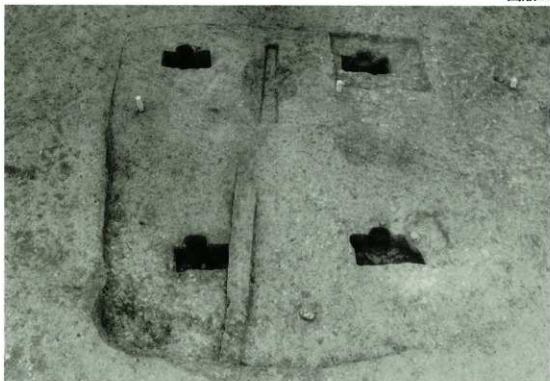
第20・22・26号住居跡



第21・24号住居跡



第1住居跡群



第10号住居跡



第11号住居跡



第3号住居跡 第15図-1



第3号住居跡 第15図-11



第5号住居跡 第20図-1



第5号住居跡 第20図-4



第9号住居跡 第27図-1



第9号住居跡 第27図-2



第9号住居跡 第27図-5



第9号住居跡 第27図-6



第15号住居跡 第40図-2



第9号住居跡 第27図-7



第9号住居跡 第28図-15



第9号住居跡 第28図-25



第9号住居跡 第28図-27



第15号住居跡 第40図-1



第17号住居跡 第34図-1



第18号住居跡 第45図-1



第18号住居跡 第45図-3



第18号住居跡 第45図-4



第18号住居跡 第45図-5



第18号住居跡 第45図-6



第18号住居跡 第45図-7



第18号住居跡 第45図-8



第18号住居跡 第45図-9



第18号住居跡 第45図-10



第18号住居跡 第45図-11



第18号住居跡 第45図-12



第18号住居跡 第45図-13



第18号住居跡 第45図-14



第18号住居跡 第45図-15



第20号住居跡 第55図-24



第22号住居跡 第60図-1



第22号住居跡 第60図-2



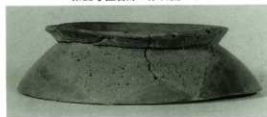
第22号住居跡 第60図-5



第22号住居跡 第60図-6



第22号住居跡 第60図-7



第22号住居跡 第60図-14



第22号住居跡 第60図-11



第22号住居跡 第60図-15

图版22



第22号住居跡 第60図-19



第11号住居跡 第74図-1



第24号住居跡 第64図-6



第25号住居跡 第67図-1



第25号住居跡 第67図-2



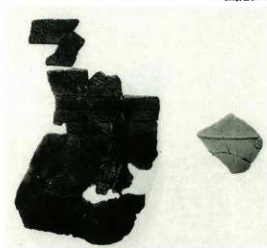
第6号住居跡 第78図-1



第6号住居跡 第78図-3



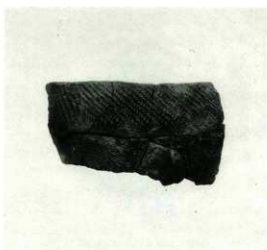
第7号住居跡 第22図-11



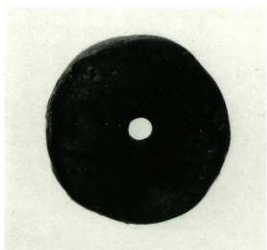
第8号住居跡 第24図-1・6



第9号住居跡 第27図-9



第14号住居跡 第37図-1



第9号住居跡 第28図-28



第13号住居跡 第35図-33



第15号住居跡 第40図-15



第19号住居跡 第49図-23



第19号住居跡 第49図-24



第19号住居跡 第49図-26



第19号住居跡 第49図-25



第20号住居跡 第56図-68



第20号住居跡 第56図-67



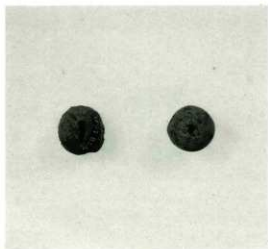
第22号住居跡 第61図-40



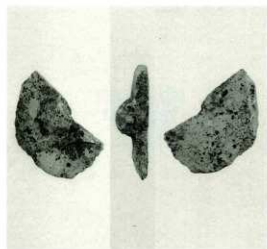
第22号住居跡 第61図-39



第22号住居跡 第61図-41



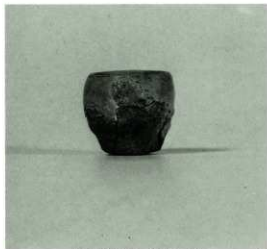
土玉



第13号住居跡 第35図-54



第3号住居跡 第15図-22



第19号住居跡 第49図-21



第20号住居跡 第56図-66



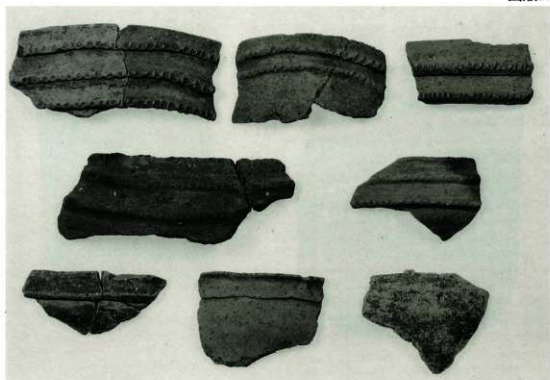
第22号住居跡 第61図-34



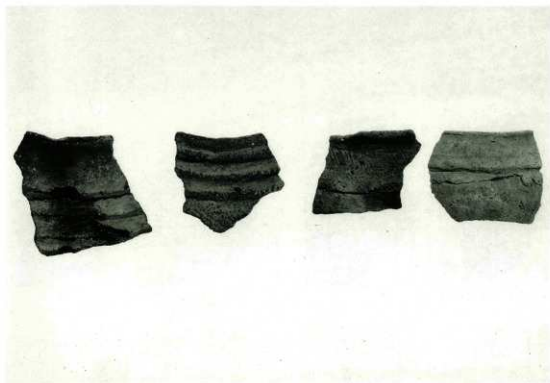
第22号住居跡 第61図-36



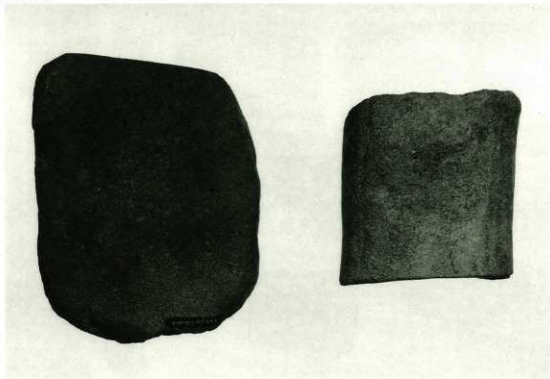
第22号住居跡 第61図-37



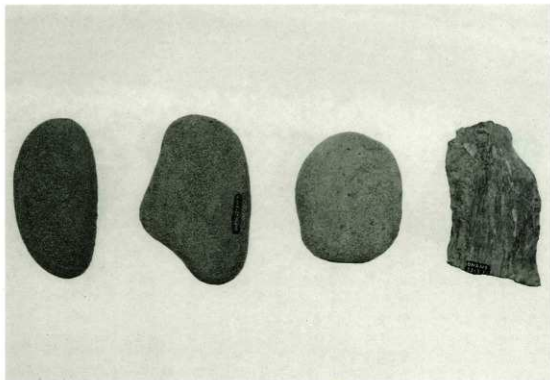
第20号住居跡出土 壺・高杯口縁部



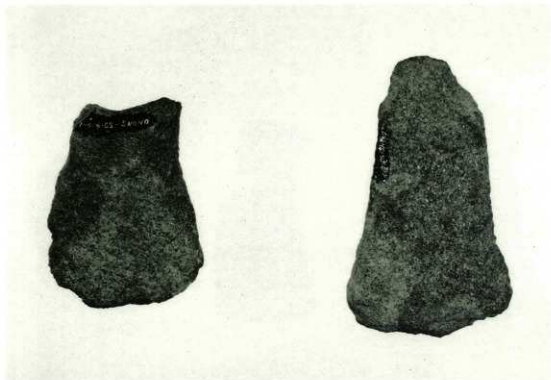
無頸壺形土器



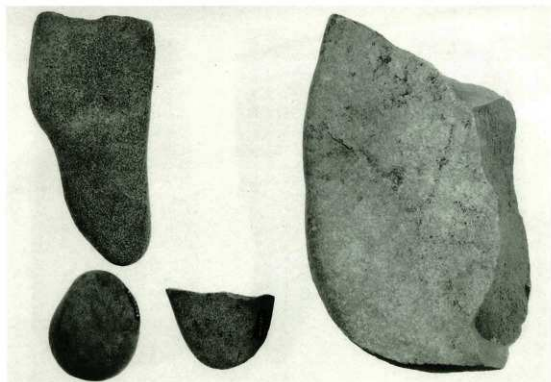
第2号住居跡出土石器



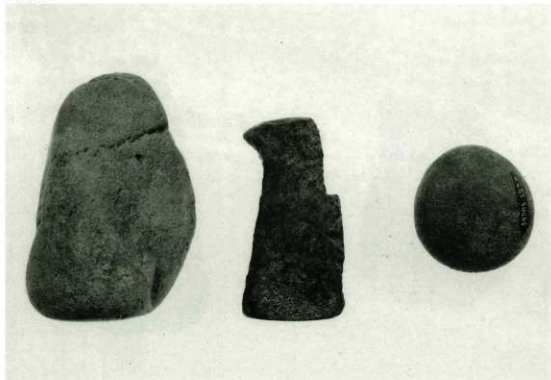
第3号住居跡出土石器



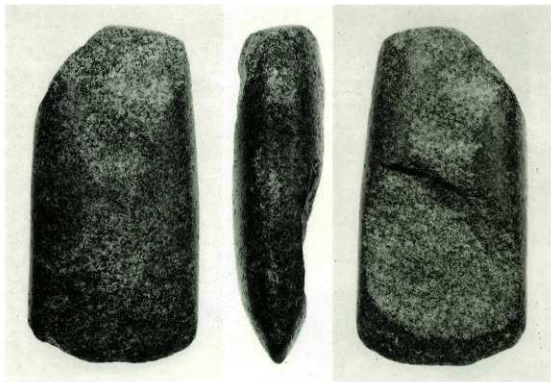
第4号住居跡出土石器



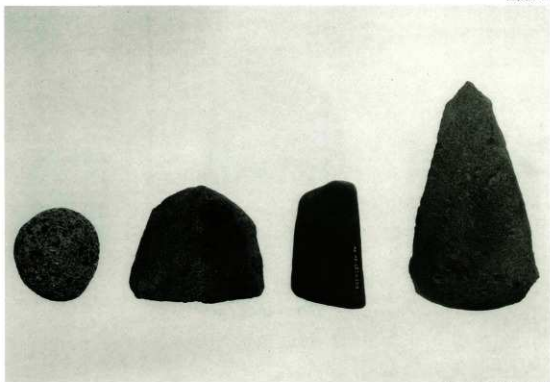
第7号住居跡出土石器



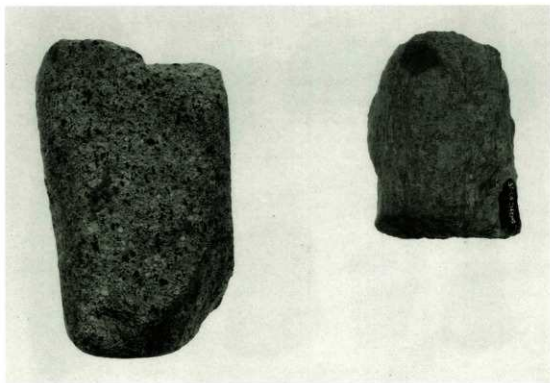
第9号住居跡出土石器



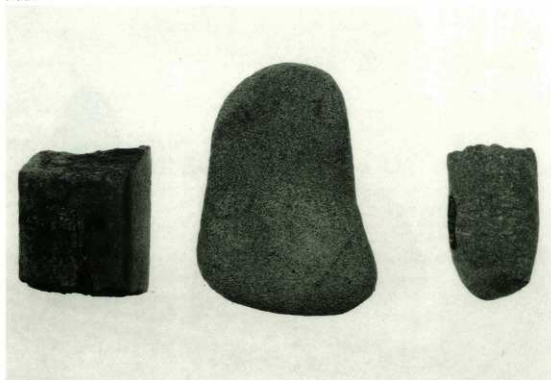
第15号住居跡出土石器



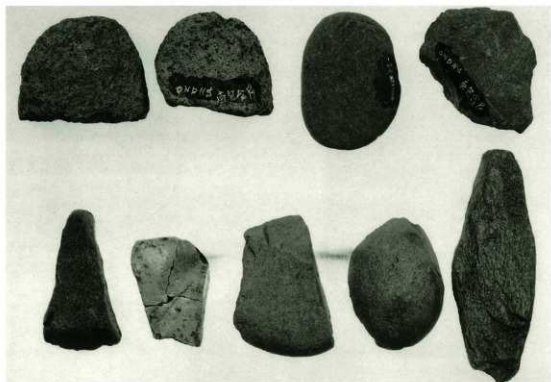
第20号住居跡出土石器



第25号住居跡出土石器



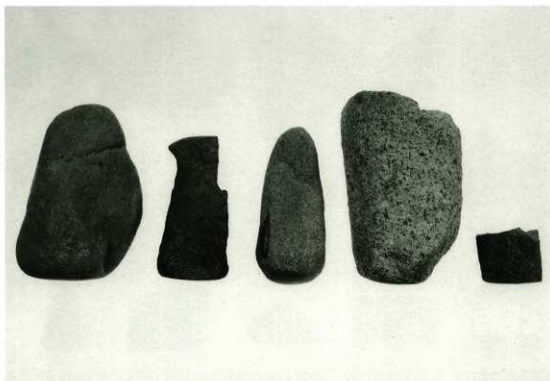
第10号住居跡出土石器



南遺物包含層出土石器

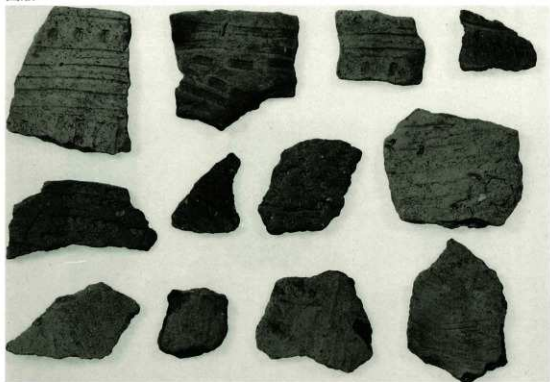


グリット出土石器

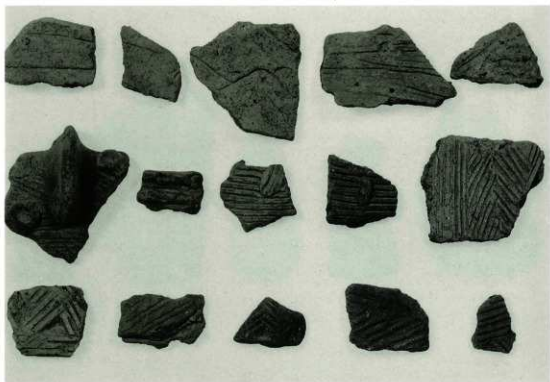


棒形磨石

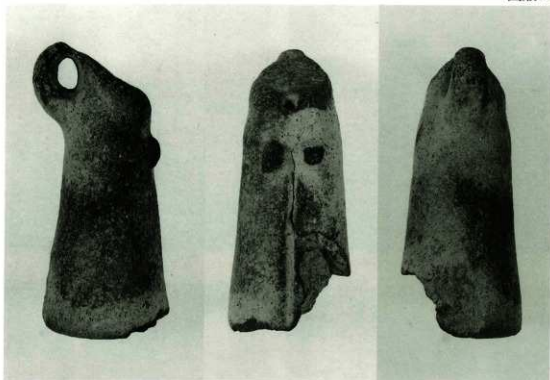
图版34



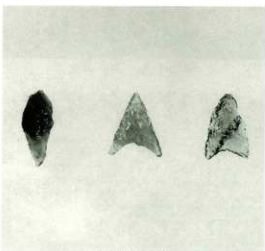
第I・II群土器



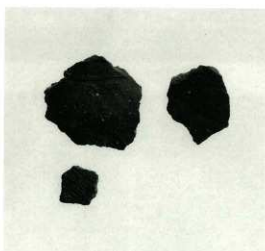
第III・IV群土器



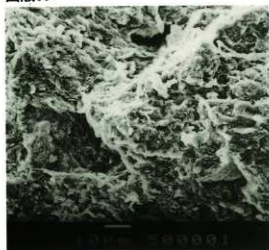
筒形土偶



縄文時代の石器



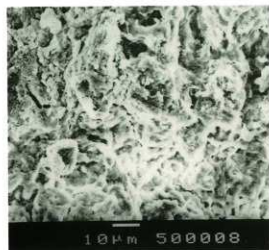
弥生時代中期の土器



胎土分析 1 (15kV × 750)



胎土分析 2 (15kV × 750)



胎土分析 8 (15kV × 750)



胎土分析 9 (15kV × 750)



胎土分析 11 (15kV × 750)



胎土分析 12 (15kV × 750)

報 告 書 抄 録

フリガナ	オオノダニシイセキ							
書 名	大野田西遺跡							
副 書 名	嵐山工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告						巻次	II
シリーズ	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						巻次	第138集
編 著 名	佐藤 康二							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所 在 地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪884 ☎0493-39-3955							
発 行 日	1994(平成6)年3月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所 在 地	コード 市町村 遺 跡		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
オオノダニシイセキ 大野田西 遺跡	埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字大野田592他	11342	176	36°4'32"	139°19'36"	平成4年 8月1日 ↓ 平成5年 3月31日	7,200	県企業局 工業団地
所収遺跡	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
大野田西 遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 後期 奈良時代 時期不詳	住居25土壇6ピット3 住居1 井戸1土壇10ピット3		土器・石器・土偶 土器・石器・土製品 土器		弥生時代後期の集 落跡で土製勾玉な ど祭祀関連遺物が 多量に出土。	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第138集

大野田西遺跡

嵐山工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—II—

平成6年3月15日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒360-01 大里郡大里村大字岡崎字船本804

電話 0493 (39) 3955

印刷

誠美堂印刷株式会社